

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『和名類聚抄』所収語注記「俗」の用法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): 古辞書, "俗", 平安時代 キーワード (En): old Japanese dictionary, "Zoku: 俗", Heian period 作成者: 萩原, 義雄 メールアドレス: 所属: 駒澤大学名誉教授
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000524">https://doi.org/10.15084/0002000524</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



## 『和名類聚抄』所収語注記「俗」の用法について

萩原義雄

駒澤大学名誉教授／国立国語研究所共同研究員

## 要旨

『倭名類聚抄』（以下、『和名抄』と記述）の用字法として、「俗」字について調査を試みることにした。まず、「俗」の語は大陸中国の漢籍仏典の注解資料などにその記載を見る語であり、此を典拠引用する邦人研究者は、此の「俗」字を「世俗字」「通俗字」として活用するようになり、古辞書に於ける真字注解などに広く見られることは、多くの先行研究者の報告に拠って明らかにされてきている。茲で、改めて平安朝時代の源順が編纂した『和名抄』に用いられている「俗」字について、標記語毎に於ける語注記内容を以て稽查することで、その伝本系統の流れを見定めていくことにした。実際、十卷本データ（馬淵和夫影印諸写本（風間書房刊）、狩谷棧齋『倭名類聚抄訂本』内閣文庫蔵）と廿卷本データ（那波道圓編纂元和版、古写本類）とをもって「俗」字の全貌を具さに検索し、各々の標記語に併せて対校表を用意した。各々の標記語における系統性を見据えておくことも重要な手がかりを求めていく上で、必要不可欠なものと考え、主なる語については現存する諸本を以て稽查し、その語例を定義づけていく上で、『字類抄』系古辞書や『名義抄』系の古辞書などの後世の本邦古辞書を活用して語毎に別稿として報告書をその都度公開してきている。此の報告結果が古辞書運用の一手法になればと考えている。

キーワード…古辞書、俗、平安時代

## 一 はじめに

『倭名類聚抄』（以下、『和名抄』と記述）の用字法として、「俗」を用いる語注記（「俗用」「俗呼」「俗云」「俗説」）について調査を試みることにした。まず、「俗」の語は大陸中国の漢籍仏典の注解資料などにその記載を見る語であり、此を典拠引用する邦人研究者は、此の「俗」字を「世俗字」「通俗字」として活用するようになり、古辞書に於ける真字注解などに広く見られることは、多くの先行研究者の報告に拠って明らかにされてきている。茲で、改めて平安朝時代の源順が編纂した『和名抄』<sup>(1)</sup>に用いられている「俗」について十卷本と廿卷本の対校表を作り、標記語毎に於ける語注記内容を以て稽查することで、その伝本系統の流れを見極めていくことを試みた。

## 二 「俗用」の標記語

「俗用之」と注せられた『和名抄』に於ける事項の検討については、稿末の表1に一覧したように廿卷本の五六語と十卷本

の五三語（総数六一語）を確認する。このなかで、語そのものについてこれまでに筆者が詳細検証した標記語については、文字を太字にし、右傍線は廿巻本のみの標記語、左傍線は十巻本のみの標記語を記載した。

「俗用」に続く「○○」の語は、以下の七種の形式が見て取れる。

(1) 通常の用法ともいう「俗用」下位部に示す漢語名の字

(一)單漢字：「的」「揭」「撥」「辻」「廷」「鬢」「椽」「鏈」

「茆」「鵒」「鮭」「蜷」「蚶」「蠍・蜥」「梘」

(二) 二字熟語：「垂髮」「刀自」「東人」「甘葛」「倭琴」「格

子「麻布」脂綿「手洗」旅籠「步障」檜曾「懸釜」莖

立「干鳥」象目「味噌」熟瓜「芋柄」和布「荒布」搗

布「青苔」「甘苔」「紫苔」「布苔」「心太」「芥子」「大根」

「海老」「小竹」「黒柿」

(三)三字熟語：「挿頭花」「高瀬舟」「平田船」「手作布」「唐

(2) 他語例を下位部に示す

(四)「筒」字の「去聲」

(五)「胡瓜」の真字体漢字「木字利／岐字利」、「夏蟲」の「奈

豆無之／奈都牟之」

(六)「老海鼠」の「此保夜二字／此注二字」

(七)「之」の標記字「校倉」(標「倉廩」)「紅花」(標「紅藍」)

以上の「俗用」による下位部の語を確認することができる。

此の二系統の『和名抄』を対校してみたことで、「俗用」の用字から得られた結果としては、両系統が共に「俗用」を用いて合致する語例が総数六一語中四九例（八〇％）と一致度が高いことが判る。標記語とその語注記内容に於ける構成の字排列についても考慮しておかねばなるまいが、斯うしたなかで、

十卷本にあつて、廿卷本にない語：①「負」②「邊鄙」③「青

〔八語〕

十卷本になくて、廿卷本にある語……⑨「倉廩」⑩「籩子」

⑪「胡瓜」  
⑫「夏蟲」  
〔四語〕

といった内訳となる。異なりの要因については、語注記の記載一覧のなかで、右に示した一二語が個々の特異性を有しているのであれば、その観点から稽查することが必要となってくる。

今、①から⑫の番号で、各々の特異性について別稿にまとめて後日公表することにした。

### 三 「俗用」下位部漢語單漢字の実例「鮭」

別稿として、「さけ【鮠】——『和名抄』から『倭名類聚鈔箋注』へ」をPDF版で提供している。いま、梗概記述として茲に示す。

慶安元年版『倭名類聚抄』と後刷り貞享版も同じ。

鮭<sup>サケ</sup>  
崔、禹、錫<sup>カ</sup>食、經<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>鮭<sup>ハ</sup>  
〔折、青、反和、名〕佐介／

今按俗用<sub>ニ</sub>鮭<sub>ノ</sub>字<sub>ヲ</sub>一非也。鮭<sub>ハ</sub>音圭。𩺰<sub>ハ</sub>鮠<sub>ノ</sub>。

魚ノ一「名也」其ノ子似タリ  
 莓ニ「音」茂今「案」莓ノ子ハ即

覆<sup>レ</sup>盆<sup>一</sup>也見<sup>タリ</sup>唐<sup>二</sup>韻<sup>ニ</sup>「赤<sup>一</sup>光<sup>一</sup>」名<sup>一</sup>年<sup>一</sup>魚<sup>一</sup>春<sup>一</sup>生<sup>一</sup>年<sup>一</sup>中<sup>二</sup>死<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ク</sup>之

※茲で、標記語を十卷本が「鮭魚」とするのに対し、廿卷本が「魚」字を取り、単に「鮭」としたこと、注記の「崔禹食經」に対し、「崔禹錫食經」と「錫」字を添えたことの差異が両本に於ける特徴とすると、源順にとって標記語をより日本語として見るとき、下位部「魚」字を必要としなかったということになる。と同時に、和名「さけ」に、別標記語「鰻・鮪・魚」を用いて、字形相似の「鮭」と「鮭」とを解説する点にも注目したい。「鮭」字を世俗では「さけ」と訓んでいることに「俗用」として注意喚起する。

実際、源順は、「俗用」を『和名抄』中に、廿卷本五七例／十卷本五三例を記載している。その内訳については、前掲『和名抄』所載「俗用」語(表1)のようになっている。「俗用□字非也」の字注形式が見えていて、此れと同じ注記形式を有する標記字としては、「鰻」字と「杉」字に於ける「相」の字にも用いられている。右に示した慶安元年版では、「俗に鮭の字を用いるは非なり(也)」とこの註記部文を訓読している。逆に、肯定の「是なり(也)」についても、標記字「比楚」、そして、下位に「是」の字だけで、補助関連データ(Excel 版データ)の「俗用」二本対校一覧に示した標記語「歩障」の語などに見えている。

※「鮭」の旁字「圭」は、「王」「主」そして、「生」の字に字形相似することから、魚偏「鮭」「鮭」共々、この標記語「鮭」の字については、「分毫字様」の語例には未収載の文字ではあるがために、その体裁を有

する漢字とみておきたい。

#### 四 注記「今呼」と「俗呼」の標記語例「專」

標記語「專」の注記中の「古語也」のあとに「今呼」と「俗呼」と異なった用法で下位「老女」へと導いている。茲で「俗」と「今」とでは時間軸を以て見ていくとき、その語意差が当然見られるであろうし、此を源順と云う一人の編者によることば選びのなかで唯一大きく変改させた語注記となっている。次にその語例を示す。

※標記語・注記文はそのままとし、注記割注の箇所については、その箇所を「」印で示した。当該語「俗呼」の箇所には囲み印で示した。以下此れに従う。

#### 【翻刻】

十卷本『和名類聚抄』注文

專 日本紀私記云專領「多字米乎佐米今案俗呼老女為專故繼於負耳」

茶茗 余雅集注云茶「宅加反字亦作榛」小樹似支子其葉可煮為飲今呼早採為茶晚採為茗「音酪」茗一名姦「音喘」風土記云姦者茗老茶名也

廿卷本『倭名類聚抄』注文

專 日本紀云專領二字讀「太字米乎佐米」今案專訓「毛波良」專一之義也太字女者毛波良之古語也今呼老女為太字女故

次於貢耳

茶茗 爾雅集注云茶「宅加反字亦作櫟」小樹似支子其葉可煮爲飲【今呼】早採爲茶晚採爲茗「音酪」茗一名萐「音喘」風土記云萐者茗老葉名也

### 【訓読】

專「日本紀私記」に「專領」二字を讀む。「多」字米乎佐【女】「今案ふるに」俗に「老女」を呼びて「專」に爲る。故に「負たうめ」に繼ぐまくの」と云ふ。

專「日本紀」に「專領」二字を讀む。「太字米乎佐米」今案ふるに、「專」の訓み「毛波良」專一の「之」義なり「也」。「太字女」は「者」毛波良の「之」古語なり「也」今「老女」を呼びて「太字女」に爲る。故に、「負たうめ」に次ぐまくの」と云ふ。

茶茗 『爾雅集注』に云はく、「茶」「宅加」の反、字は亦「櫟」に作く」は小さき樹にして「支子」に似て、其の葉、煮て飲むと爲べし、今、早採りを呼びて「茶」と爲し、晩採りを「茗」「音は酪」と爲す、「茗」は一名に「萐」「音は喘」といふ。『風土記』に云はく、「萐」は「茗」の老葉の名なりといふ。

※茲に取り上げた標記字「專」の語では、十卷本は「俗呼」と注記するところを廿卷本では、「今呼」と記載する。漢語「老女」の和語「太字女」における時間軸という異語選択による変改に注目せねばなるまい。「一呼」の上位語で「俗」と「今」とでは異なる記載な

のだが、十卷本にも他の標記語に注記「今呼」を用いる標記語「茶銘」の語例があり、此の標記語「茶銘」では、引用『爾雅翼』に於ける、「○揖雜字云茗之別名也疏櫟一名苦茶郭云樹小似梔子冬生葉可煮作羹飲【今呼】早採者爲茶晚採者爲茗一名萐蜀人名之苦茶」のなかで用いていた「今呼」の語文をそのまま引いたに過ぎない。此を十卷本と廿卷本が共通継承するのは当然のことと言える。

此れに対し、標記語「專」が語注記のあたみに、本邦資料『日本紀私記』（十卷本）、『日本紀』（廿卷本）の書名を引用し、資料名を異にしつつ熟語「專領」の語を所載し、真字体漢字表記（＝万葉仮名）の「多字米乎佐米」と「太字女乎佐女」を以て和名「たうめをさめ」の語を所載する。そして、単字標記語「專」について説くという他語とは稍異なる形態をとっており、語注記の用字も「今案俗呼」（十卷本）、「今案專訓」（廿卷本）とし、増補注記（和名）「毛波良（林道春は「モツハラ」と朱訓読する）」を、「專一の「之」義なり（也）。「太字女」は「者」毛波良の「之」古語なり（也）」の文言を増補する。「今、老女」を「專」／「太字女」に爲り呼ぶ、故に、「貢」に「於」次ぐまくの「耳」（私意に訓読）を茲に置く。十卷本がそのまま「專」とするのに対し、廿卷本では和名「太字女」と和語に和らげて表現する。其の上で引用した本邦の文献資料の原書『日本書紀』とその注釋書『日本紀私記』（＝矢田部宿祢公望撰『田氏私記』）の引用書名の相異を見据えて考察を試みておくと、

編者源順がどちらの書物を先後としているのかによって取扱いが変わるのではと推定し、此の標記語「専」の語注記を先に原書『日本書紀』に求めてみた。

その結果、「専」字一六例、「領」字六三例を検索し得た。此のなかで、両語に共通する巻が巻七の景行紀に認められ、連続する「専領」の語例として、

○故汝<sup>カ</sup>専<sup>タツメ</sup>領<sup>メヨ</sup>（東ノ國<sup>ヲ</sup>「熱田本二二、一〇八頁5」）

【訓読】故、汝<sup>かれ</sup>専<sup>い</sup>東國<sup>あづまのくに</sup>を領めよ」とのたまふ。

を得る。同じく、狩谷掖齋『倭名類聚鈔箋注』も景行紀を既に挙げている。では、『日本紀私記』（＝『田氏家集』）についてはどうなっているのか、景行紀に該当する語例は見出せない。此のなかで巻十の應神紀に「専使」の語例が見えているので、次に掲げておく。

『日本紀私記』巻下（早稲田大学図書館蔵）

太宇女豆加比／専使 ※茲での「」印は改行を示す。

といった記載を見る。此の語例を以て、熱田本『日本書紀』巻十應神紀に、「天皇遣<sup>タウメツカヒ</sup>専使<sup>メヨ</sup>」（二〇三頁5）（小学館日本古典全集一は、「専使<sup>もはらのつかひ</sup>」と訓むのだが、「もはら」の語訓は当に時代に見合った平安朝期に誕生した新訓と言える。<sup>6</sup>）茲は大本系に倣うことが穏当ということになろう）を載せる。この語を引用する用語「今呼」を両系統共に用いていることもあり、編者源順自身が「今呼」の用語を用いているのは纔か一例なのだが、

「今」という時間軸での記述式に用いていたことも少しく検討するとき、現代の吾人達も「いま【今】」という時間軸に基づく記述式の注記には、「今案」の用語も両系共に最も多く用いられていて、延べ語数三九一語のうち両系共に用いているのが二三八語（六一％）となっている。

廿卷本に「今案」有、十卷本無は、六一語

廿卷本に「今案」無、十卷本有は、九二語

となる。茲ではこれ以上は述べずに置くが、此の用語についても改めて語解析する余地が残されている。

## 五 語注記「俗云」について

また、「俗用」とせずに「俗云」とする語例総数一九〇語（廿卷本一七九語、十卷本一五四語）についても同様の稽查を行っておいた。実際、十卷本で「俗用」を用いているところに、廿卷本では「俗云」と記載する標記語が(1)「青木香」(2)「夏蟲」(3)「胡瓜」に見え、逆に、廿卷本に「俗用」を用いているのに未記載とする標記語(4)「倉廩」(5)「籬子」(6)「籠」(7)「篠」(8)「檜楚」などの語は「用」と記載する。「式文同用」とする標記語としては、(9)「海松」。(10)「千歳藥」で「此間」の語が見えている。此の語注記における差異については更に考察しておく、十卷本で未記載とする文言が廿卷本においては記載されている点は見逃せない。

【籥】「高麗笛」除吹處而六孔之笛也



【竹】「四聲字苑云竹「陟六反和名多計」草也一云非草非木兼名苑注云筠「王麿反」竹摠名也」孫愔『切韻』曰／云篁「音皇」和名」太加无良『俗云』竹叢／藁也

※十卷本における標記語「竹」(「卷十草木下竹類」と「篁」(「卷十草木下竹具」と各々別立てにして記載し、二語に排列するのを廿卷本ではひとつに統括するものとなっている。分離なのか、統括なのかの議論も当然ありとあらゆる角度から精査することも必要とせねばなるまいが、編纂次第の流れから捉えたとき、やはり分離語を統括語化するという方向性についてはとる立場にある。

四声字苑云竹「陟六反」多介」草也一云非草非木兼名

苑注云筠「王麿反」竹摠名也「十卷本」

四聲字苑云竹「陟六反」和名多計」草也一云非草非木兼名

苑注云筠「王麿反」竹摠名也「廿卷本」

※万葉仮名表記の字母「介」と「計」については、実際『和名抄』全体での使用数は、十卷本「介」九五語「計」一四語総数一〇九語、廿卷本「介」一四一語(うち、職官・国郡部四二語)・「計」一七語(うち国郡部四例)総数一五八語の使用語数となっている。

そのあとの標記語「篁」の語注記内容についても見定めておくと、典拠名を十卷本が「孫愔云」に対し、廿卷本は標記語「竹」の語注記では「和名」の用語を増補し、「篁」の語注記には「孫愔切韻」と『切韻』の書名が増補されている。

これ等のことから、廿卷本が後に増補した可能性がより高くなるという見方に近づいたと見ている。

## 六 二系統本対校表にみる「俗云」の語

「俗云」の用語は、総数二五八語で、十卷本二〇五語、廿卷本二三五語となっている。その内訳は、「俗云」の下位語に真字体漢字表記(＝万葉仮名)が一七四語で、十卷本が欠語とする標記語が五七語、これに対し、廿卷本が欠語とするのは二七語と少ない。その詳細を先ず論じる。そのあとに、特徴となる語、数例について述べる。

### 六一 「俗云」を記載する語

#### (1) 両本記載が共通する語(一七四語)

(以下、補助関連データ(Excel版データ)におけるA列「通番」の数字を添えて示す。)

24「霈」 49「峡」 145「流黄」 187「稻魂」 188「幸魂」  
256「遊女」夜發附」 342「顚」髑髏附」 375「洩」梯  
字附」 388「吭」 408「臈臍」 415「醫」后片附」 424「指」  
465「膝髀」 470「踝」 471「踵」 477「陰囊」 478「陰核」  
481「月水」 491「清盲」 492「近目」 496「雀盲」 501  
「兔缺」 524「脚氣」 525「痿痺」 526「轉筋」 533「虺蟲」  
535「痔」 538「癰」 542「産後腹」 543「陰類」 546「癩」  
狂」 548「醢酒」 549「瘡瘍」 551「霍乱」 552「■」(「  
+ 疔+口」) 病」 559「疽」 561「瘰癧」 562「乳癰」 565  
「浸淫瘡」 567「癭瘻」 570「附贅」 574「癬」 577「疥」  
607「馳射」 608「照射」蹤血附」 630「双六」 641「拍

浮」643「碁局」654「鉦鼓」655「方磬」658「大鼓」660  
 附」659「揩鼓」662「腰鼓」666「箏」674「笙」  
 「匏簧附」675「筆簾」680「莫牟」6279「殿」6432「柩」6440  
 6367「邸家」6368「店家」6407「壇」6432「柩」6440  
 「関木」6445「楸」6446「闕」6481「舟事類」6510「長  
 簷車」6512「副車」6523「轂」6530「車簾」6535「裕  
 誕」6553「連錢驄」6558「騅」6571「鼻梁」6574「排鞍肉」  
 雪馬附」6570「驢」6571「鼻梁」6574「排鞍肉」  
 6575「脊梁」6576「承鐙肉」6579「歷草」6581「烏頭」  
 6584「陰脈」6586「嘶」6588「蹄躡」6589「脊  
 瘡」6591「脚病」6592「腹轉病」6615「瑠璃」6622「鋤  
 石」6648「甲香」6873「炬火」6875「烽燧」6875「火振附」  
 6913「帛」6924「雲冠」6932「纓」6948「裘」6962  
 「欄」6990「糸鞋」6998「草履」7008「擦」7013「笠篋」  
 7020「浴室」7025「鐘」7036「三針」7040「鉢」7044  
 「三衣匣」7047「袈裟」7049「衲」7057「偶人」7059「紙  
 錢」7060「神籬」7070「瑞籬」7085「書案」7090「版  
 位」7115「箭」7151「笏」7171「斗」7182「白  
 粉」7185「黒菌」7187「鐘子」7194「巾箱」7208「苞苴」  
 7214「剪刀」7255「簍」7266「帳」7299「簞」  
 7302「行纏」7313「香輿」7314「火輿」  
 7317「門燎」7322「鞍褥」7324「韉」7328「杏葉」  
 7338「金錢」7339「尾韜」7340「鑣」7342「轡」7343

「承轡」7355「輓」7399「轆轤」7467「銚子」7472「鈔  
 鑼」7474「金碗」7488「椀」7513「盃」7532「醅」  
 字附」7542「漿」7554「餉」7559「餠」7568「餠餅」  
 7570「饅饅」7598「臍」7602「炒饅」7614「臍」7627  
 「生薑」7641「稽」7677「菓蓂」7818「卵」7823「孔雀」  
 7888「鷓鴣」7901「羽」7906「翹」7962「鼯鼠」  
 7989「魚」8004「王餘魚」8046「鮓」8048「鱗」8052「鱗」  
 8100「甲」8149「寒蜩」8379「■」8391「竹  
 筴附」8439「櫻欄」8473「石楠草」

## (2) 十卷本欠語 (五七語)

### A 標記語が欠 (九語)

229「相上」232「陶者」236「裨販」735「平調曲」752「道  
 調曲」868「史生」886「局」校書殿附出」6566「駁馬」  
 8405「兩節間」

### B 標記語・注記語はあるが、「俗云」の語が欠 (四五語)

276「父・母」290「母兄」392「髻」663「拍子」667  
 「琵琶」670「筆篋」671「笠篋」6281「堂」6281「堂」6281「堂」  
 附出」6363「厨」6385「懸魚」6393「天井」6578「汗  
 溝」6580「尾株」6590「腹瘡」6593「鷺」6633「青木香」  
 6902「綺」7028「匳」7029「火舍」7091「竿」7164「塵  
 尾」7493「確」7509「盆」7512「柶」7555「餅  
 碯字附」7571「鮓子」7584「乳麴」7586「蜜」7592



「黄葉」 7652 「糯米」 7692 「鴨實」 7720 「栗刺」 7720 「罽發附」  
 7730 「胡瓜」 7739 「薯蕷／山芋」 7821 「孳尾」 7822 「鳳凰」  
 7921 「畜」 7924 「遊牝」 8152 「夏蟲」 8206 「菊」 8208 「紫  
 苑」 8214 「金錢花」 8216 「萱草」 8406 「梅檀」 8409 「蘇枋」  
 C 標記語・注記語はあつて、注記に異同で「俗云」の語が  
 欠〔三語〕

176 「雷公」〔電等附〕 231 「鍛冶」 7828 「鷹」

### (3) 廿卷本欠語〔二七語〕

A 「俗云」＋万葉仮名〔一二語（うち「\*廿」印の一語は廿卷  
 本のみ未所載。以下同じ）〕

201 「天探女」 252 「涉人／渡子」 461 「腕」 495 「目翳」

500 「吃」 596 「膿」 6370 「庵室」 6626 「衰衣香」 7816

「鶯鳥」〔鵲字附〕 7847 「鴛子鳥」 7732 「茄子」〔醃字附〕

\*廿〔（高麗笛）〕

B 「俗云」＋字音注〔七語〕

6914 「紗」 7100 「緑青」 7101 「雌黄」 7286 「圓座」 7711

「枇杷」 8346 「蒴藿」 \*廿〔（行宮）〕

C 「俗云」＋差声語〔二語〕

560 「癰」 673 「簫」

D 「俗云」＋意義注〔六語〕

476 「玉莖」 7206 「梓」 7320 「鞍」 7469 「鎗」 7491 「擧」

7698 「冬桃」

※差異二七語は、上記の体裁から成る。これを以て、標記語と語注記  
 について些少なりとも次に語解析しておくことにする。

### 六一二「俗云」を記載する特徴ある語

#### (1) 「俗云」の下位部を標記語＋万葉仮名の五語

（上位部に十卷本、下位部に廿卷本を記載し、その境界部の符号に「」  
 印を以て示した。以下此れに従う。）

各語には、補助関連データ (Excel 版データ) における A 列「通番」の数  
 字を添えて示した。また、あわせて、六一一節における区分 (1)、(2) A～C、  
 (3) A～D を添えたものもある。）

(2) A 236 【裨販】×／販婦「比佐岐女」裨販也

(3) B 7286 【圓座】「圓座」円座一云和良布太「圓草褥也」  
 圓座一云和良布太「圓草褥也」

※廿卷本は「此間云」として下位語注記を記載する。両本とも「一云」  
 を挟む。廿卷本が当該語を「俗云」から「此間云」に源順自身が仕  
 立て直した事由は一体、何かを今後解き明かす必要がある。また、  
 先後を逆に見据えていくときでも、源順が此の「俗云」と「此間云」  
 と云った二つの用語を明確に使い分ける意識を備えていたことを明  
 らかにする必要がある。

(2) B 7652 【糯米】「糯米」夜歧古女榛之處上声「焼稻爲米  
 也」焼米夜木古女可用糯米二字「焼稻爲米也」

(1) 608 【照射】土毛之「蹤血」波加利／止毛之「蹤血」  
 波加利

(2) A 868 【史生】 × / 医「久須<sup>くすし</sup>」博士「波加<sup>はかせ</sup>世」弩師  
 「於保由美<sup>おほゆみのし</sup>乃<sup>の</sup>之<sup>し</sup>」

※十卷本には、236と868の標記語は未記載となっている。他に229「相公」232「陶者」735「平調曲」752「道調曲」886「局」6566「駁馬」8405「両節間」(番号は甘卷本の通番で表示)の語、計九語がある。  
 注記文言はあるが、231「鍛冶」と7828「鷹」の二語は注文言に「俗云」の用語を未記載にする。

## (2) 「字音+万葉仮名」乃至「万葉仮名+字音」の九語

(1) 145 【流黄】「石流黄」由王<sup>ゆわう</sup>焚石液也 / 由王<sup>ゆわう</sup>磬石液也  
 (1) 574 【癰】「癰」音浅俗云<sup>せにかさ</sup>錢加佐 / 音浅俗云<sup>せにかさ</sup>錢加佐  
 (1) 674 【笙】「笙」音生俗云<sup>せいのふ</sup>象乃布江 / 音生俗云<sup>せいのふ</sup>象乃布江

(1) 6440 【関木】「関木」貫乃木<sup>くわんのき</sup> / 以横木持門曰関所以関也  
 / 一関也

(2) B 7739 【薯蕷】「山芋」夜万乃伊毛 / 和名夜萬都以毛俗云<sup>ひまのいも</sup>山乃以毛<sup>ひまのいも</sup>

(1) 666 【箏】<sup>あやの</sup>乃古度 / <sup>あやの</sup>象乃古止

(1) 7008 【檠】<sup>へん</sup>心乃波之良 / <sup>へん</sup>心乃波之良

(1) 7313 【香輿】<sup>か</sup>香乃古之 / <sup>か</sup>香乃古之

(2) B 7592 【黄葉】<sup>わ</sup>王佐以 / <sup>わ</sup>王佐以

## (3) 「俗云」下位を字音語の三八語

(1) 559 【疽】「七余反俗云去声一名<sup>は</sup>發背」久癰也 / 「七餘反俗云<sup>は</sup>發背」久癰也

(3) C 560 【癰】「於容反俗云去声」氣壅結而不潰也 / 「於容反」氣壅結而不潰也

(1) 643 【碁】碁局「渠玉反碁局俗云<sup>ゴク</sup>五半」碁板枰也 / 「渠玉反碁局俗云<sup>ゴク</sup>五半」碁板枰也

(1) 654 【鉦鼓】鉦鼓之聲「鉦音征俗云常古」 / 鉦鼓之聲「鉦音征鉦鼓俗云常古」

(1) 655 【磬】「苦定反俗云<sup>ヘウキヤウ</sup>方磬」磬音強 / 「苦定反方磬俗云<sup>ヘウキヤウ</sup>奉強」

(2) B 667 【琵琶】「毗婆二音」本出於胡也 / 「毘婆二音俗云<sup>ヒバ</sup>微波」二音「本出於胡也」

(2) B 670 【箏篳】「今案箏字未詳」 / 「箏篳俗云空古今案箏字未詳」

(2) B 671 【箏篳】「空侯二音楊氏漢語抄云箏篳百濟琴也」漢武時人依琴製之 / 「空侯二音俗云<sup>コウコ</sup>如江胡」二音楊氏漢語抄云箏篳百濟國琴也和名久太良古止<sup>コウコ</sup>「樂器也兼名苑注云箏篳漢武時人依琴製之」

※「俗云」の用語は560「癰」では甘卷本に未記載にし、670「箏篳」は反対に十卷本で未記載にする。671「箏篳」も十卷本に未記載にするのに対し、甘卷本には「和名」以下の注記に万葉仮名表記の和訓、意味、典拠書名が増補されることでより補正がなされたものと言え

る。

(3) C 673 【簫】〔音蕭俗云去声〕編竹吹之長則濁短則清以蜜蠟實其底而增減則知之／〔先堯反〕〔和名〕世字乃布江其形参差象鳳翼也

※引用書目が十巻本が『蔡邕月令章句』とし、廿巻本が『風俗通』としていて異なり、自ずとその注記引用内容も異なった記述となっている。「俗云」の用語は十巻本に記載をみる。

(2) A 735 【平調曲】×／宮商荆仙樂〔俗云荆仙樂〕

(2) A 752 【道調曲】×／散手破陣樂〔俗云散手〕

(3) B \* 廿 【行宮】〔賀利美夜今案俗云頓宮〕／×

6279 【房】〔音防俗云音望〕旁也在室之兩方也／防反在室之兩方也禁中房名

※廿巻本には「防反」で「俗云」を含む語注記の文言を未記載にする。

6363 【廚】〔厨〕×／庖丁俗云抱長二反倉厨也

(2) B 6385 【懸魚】〔弁色立成云屋脊桁端懸板名也凡桁端有之〕／〔俗云如字辨色立成云屋脊桁端懸板名也凡桁端有之〕

(2) B 6393 【天井】菱藻水中之物以厭火災也／〔俗云殿掌〕菱藻水中之物以厭火災也

(1) 6523 【轂】〔古禄反楊氏漢語抄云車乃古之歧俗云簡〕輻所湊也／〔古禄反漢語抄云車乃古之歧俗云簡〕輻所湊也

※十巻本が書名『楊氏漢語抄』とするに、廿巻本が『漢語抄』と略記する。

(1) 6622 【鍮石】鍮〔他侯反字亦作鉅鍮石二音俗云中尺〕石似金西域以銅鐵雜藥令爲之／鍮〔他侯反字亦作鉅鍮石二音

俗云中尺〕鍮石似金西域以銅鐵雜藥合爲之

(2) B 6633 【青木香】〔俗用〕象目〕出天竺是草根狀似甘草／〔青木〕〔俗云象目〕出天竺是草根狀似甘草

※十巻本は「俗用」と記載する。また、廿巻本注記「青木」と「香」字欠。

(1) 6648 【甲香】〔俗云甲音合〕螺属也可合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭／〔俗云合講二音〕螺属也可合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭

(2) B 6902 【綺】〔虚彼反歧一云於利毛能又一訓加无波太〕似錦而薄者也釋名云綺某也謂方丈如某也／〔虚彼反〕〔俗云岐一云於利毛能又一訓加無波太〕似錦而薄者也釋名云綺某也謂方丈如某也

※十巻本「俗云」の用語を未記載にする。

(3) B 6914 【紗】〔所加反〕〔俗云射〕似絹太輕薄也／〔所加反〕〔俗音射〕似絹太輕薄也

(2) B 7091 【筭】〔蘓貫反〕〔俗音殘〕長六寸以計曆數也／〔筭〕〔蘇貫反俗云殘〕長六寸以計曆數

7100 【綠青】一名碧青〔綠青俗云緑省〕／一名碧青〔綠青俗音緑省〕

(3) B 7101 【雌黃】一名金液〔雌黃俗云之王〕山有金其精熏則生雌黃耳／一名金液〔雌黃俗音之王〕山有金其精薰則生雌黃耳

(2) A 7164 【麈尾】〔麈音主俗音朱美〕／〔麈尾俗云朱美〕  
(1) 7399 【轆轤】〔鹿盧二音俗云六路〕圓轉木機也／〔鹿盧

二音俗云六路」圓轉木機也

(2) B 7822 【鳳凰】雄曰鳳雌曰凰「俸皇二音」毛虫之長也／

雄曰鳳「音俸俗云豐」鳳「音皇」羽蟲之長也

(1) 7823 【孔雀】「俗云音宮尺」毛端圓一寸者謂之珠毛々々文如畫此鳥或以音響相接或見雄則有子矣／俗云宮尺」毛端圓一寸者謂之珠毛毛文如畫此鳥或以音響相接或見雄則有子矣

(1) 7906 【翹】「渠遙反今案俗云翡翠是」鳥尾上長毛也／「渠遙反今案俗云翡翠是」鳥尾上長毛也

(2) B 8406 【旃檀】「仙壇二音此間云善短」香木也内典云赤者謂之牛頭栴檀／「仙壇二音俗云善短」香木也内典云赤者謂之牛頭栴檀

※「此間云」については、注7を参照されたい。

(2) B 8409 【蕪枋】「音方俗音湏方」人用染色／「唐韻作放音與方同俗云須房」人用染色者也

(1) 8439 【櫻櫚】「念閏二音」一名蒲葵説文云「櫻櫚可以為草」「拼音并今案即櫻櫚也俗云種路」／一名蒲葵「櫻櫚二音忽閏俗云種魯」説文云「櫻櫚可以為索」「拼音并櫻櫚即櫻櫚也」

(2) A 7028 【匳】俗音輪／俗云輪

(2) B 7029 【火舍】俗音化緒／俗云化緒

(1) 7090 【版位】俗云變為二音／俗云變為二音

(1) 7314 【火輿】今案俗云火輿是／今案俗云火輿是

(1) 7317 【門療】力弔反俗云門火／門火

(1) 6932 【纓】於盈反俗云燕尾／燕尾

(1) 6962 【欄】音蘭俗云如字／如字

このように、「俗云」の用語を見ておくと、両本系共に記載があるのは一語に留まり、十卷本だけが記載するのが七語、廿卷本のみに記載があるのは一五語となっている。茲で、「俗云」の用語のなかで十卷本が「俗音」とした注記改編するのに対し、6914【紗】と7101【雌黄】の二語だけが廿卷本に「俗言」を用いて逆の編纂指向の現象を示している。その逆として、廿卷本が「俗云」とする語例は、7091【竿】、7164【塵尾】、8409【蕪枋】の三語が見え、此れに7823【孔雀】の「俗云音」を「俗云」にする一語、「俗用」6633【青木香】の一語、「此間云」とする8406【旃檀】の一語とがあつて、「此間」と「俗云」との用語についての連関性を探らねばならないことも確かなことである。『和名抄』に於ける「此間」の用法については、既に永山勇（一九六三・三六四頁）、大友信一・江口泰生（一九八六）、宮澤俊雅（一九九四）「89番百廿七」【栴檀】「善短」（二九〇頁）としているのや、不破浩子（一九八八）資料の標記語「星」での記述や池田証壽（一九八八）などが既に指摘されてきている。此の近称指示の語「此間」について、宮澤俊雅（一九九四、二〇一〇）がこれまでの論を整理し、「いん」「このごろ」の本邦での語意識を述べる用語と認定したこともあつて、『和名抄』に於ける一つの導きを成し得ていて卓越した論と言えよう。その最後に、単なる憶測と断って持論から読み手を促

した、「源順は「此間云」を内親王を含めて「われわれの世界」としてとらえ、一方「俗」という時には内親王とは無関係に、自分を含めた「しもの世界」を表現したのではなからうか。」〔宮澤俊雅（二〇一〇：三〇六頁）・傍線は筆者に拠る〕については、両系統本『和名抄』流布の流れを知るうえで重要なキーワードに近づいていたと吾人は見ている。その意味で、標記語「梅檀」の語は、十巻本が「此間云」と記載する箇所を廿巻本が「俗云」としている先後関係論の是非の扉を開く語例に位置づけておきたい。

また、江戸時代末の狩谷棧齋自身も、『倭名類聚鈔箋注』の卷十校譌草木部下にて指摘するも、その異同の事由についてまでの近現代の解明論には及んでいなかったと言える。

## 七 「俗云」下位部真字体の万葉仮名表記一覧

### 七一

「俗云」の下位部で最も多いのが真字体の漢字表記（＝万葉仮名）の語例で、その総数は一八五語（内実数：十巻本一四八語、廿巻本一七五語）を見る。次に示す語の総数は一六九語とする。

（万葉仮名表記の語例を記載するうえで、「×」印で一方が未記載を示し、「／」印で上部に十巻本と下部に廿巻本の万葉仮名を記載した。その表記の不明な箇所や異同については、万葉仮名部分に傍線を付記した。）

### (1) 標記語、両系統が共通〔八二語〕

24 【霽】「一／雨水」比布留 252 【涉人】「一／渡子」和太之毛利 408 【脛臍】倍曾 415 【醫】「肩片附」「一／尻」井佐良比 461 【腕】宇天 465 【膝舐】「一／臙」阿波太 471 【踵】「一／跟」歧比須 477 【陰囊】布久利 478 【陰核】篇乃古 481 【月水】佐波利 491 【清盲】阿岐之比 492 【近目】智賀米 495 【目翳】比 496 【雀盲】「雀盲／雀盲」度利女 500 【吃】古度々毛利 524 【脚氣】阿之乃介 533 【蛭蟲】加以又云阿久太 538 【癰】之利於毛 542 【産後腹】「一／産後腹痛」之利波良 543 【陰類】「陰類／治陰類方」曾比 546 【癲狂】「一／天狂」毛乃久流比 548 【酩酒】「一／酒狂」佐加々理 552 【＝】「（才＋屯＋巳）病」「一／説文云癰」音唐俗云衣夜美「云和良波夜美」 561 【瘰疽】倍宇曾 562 【乳癰】「一／疔」知布 565 【浸淫瘡】心美佐宇 567 【瘰癧】路 570 【附贅】「一／附贅懸疣」布須倍 577 【疔久路久佐 596 【膿】字美古又云字美之留 630 【双六】「一／六采」須久呂久 641 【拍浮】於布須 658 【大鼓】「枹附」「一／枹」豆々美乃波知 659 【拊鼓】「一／拊鼓」須利都々美 6446 【闔】「一／闔」度之歧美 6481 【舟事類】「一／艘」爲流 6535 【裕誕】久々於保比 6567 【驢馬】踏雪馬附】「一／驢」阿之布知 6570 【驢】鬚附】「一／鬚」鬚驢宇奈加美 6579 【歷草】曾布岐 6581 【烏頭】「一／曲肘」久波由岐 6584 【陰脈】「陰脉／陰脈」麻良佐夜 6589 【脊瘡】



多胡 6591【脚病】知阿察歧 6615【瑠璃】留利 6873【炬火】太天阿加之 6875【烽燧】「火楸附」【一／火楸】保久之 6913【帛】波久乃歧奴 6948【裘】加波歧沼 6990【糸鞋】之賀伊 6998【草履】佐宇利 7020【浴室】「一／温室」由夜 7040【鉢】波智 7047【袈裟】介佐 7049【衲】「一／納」能不 7060【神籬】比保路歧 7070【瑞籬】姜豆加歧 7085【書案】不美都久惠 7115【箭】夜之利 7171【斗】概附】「一／概」度加歧 7185【黒齒】波久路女 7187【鐻子】「一／鐻」計沼歧 7302【行纏】【■（＋＋）附】「一／脛巾」波々歧 7322【鞍褥】宇波之歧 7340【鑪】久々美 7342【轡】久都和 7343【承韉】三都々歧 7513【盃】毛比 7532【醅】「醪字附】「一／醅」醪」糟米阿久 7542【漿】迹於毛比 7559【餠飴】「一／餠飴」伏兔 7570【饌饌】比知良 7571【餽子】「一／餽」音都以之 7586【蜜】美知 7592【黄菜】王佐以 7598【腴】加須毛美 7627【生薑】阿奈波之加美 7641【櫓】比豆知 7711【枇杷】味把 7732【茄子】「醃字附】「一／醃」醃惠久之 7888【鸕鷀】「一／鸕鷀」字 7924【遊牝】由比

## (2)漢字表記語（一三語）

6932【纓】燕尾 6962【欄】如字 7013【筵篲】空王古 7028【廢輪】7029【火舍】化緒 7151【笏】尺 7194【巾箱】打乱匣 7314【火輿】火輿 7317【門燎】門火 7399【轆轤】

六路 7906【翹】翡翠 8046【魴】氷集 8379【■（＋＋）皂英】「一／皂英」蛇結

## (3)混種語（漢語＋和語）（一語）

7008【檫】心乃波之良 7313【香輿】香乃古之

## (4)十卷本が「俗云」を未記載（三五語）

（一）注記語を有し、前に別語を置く（二八語）  
176【雷公】「電等附】 276【父母】 290【母兄】 392【髻】 6363【厨】 6578【汗溝】 6580【尾株】 6590【腹瘡】 6593【驚】 6902【綺】 7493【確】「程附】 7509【盆】 7512【瓷】 7555【餅】「碁字附】 7586【蜜】 7592【黄菜】 7652【糯米】 7692【鴛鴦】 7720【栗刺】「罽發附】 7730【胡瓜】 7739【山芋】 7821【孳尾】 7921【畜】 7924【遊牝】 8152【夏蟲】 8208【紫苑】 8214【金錢花】 8216【萱草】  
（二）標記語及び注記語を未記載（七語）  
232【陶者】 236【裨販】 735【平調曲】 752【道調曲】 868【史生】 886【局】「校書殿附出】 6566【駁馬】

## (5)廿卷本が「俗云」の語を未記載（一三語）

（一）注記語を有し、前に別語を置く（一二語）  
201【天探女】 252【涉人】 461【腕】 495【目翳】 500【吃】 596【膿】 6370【庵室】 6626【裏衣香】 7286【圓座】



7732【茄子〔酸字附〕】 7816【鶯鳥〔鵲字附〕】 7847【獨子鳥】

(二) 標記語及び注記語を未記載〔一語〕

\* 廿【高麗笛】

# (6) 両本別注記による万葉仮名表記〔四語〕

501【兔缺】字久知／以久知

※和語を「うくち」から「いくち」と云った語形変容については、鎌倉時代の印融自筆本『塵袋』巻六にその語源を「本牀<sup>ハ</sup>ウクチト云<sup>フ</sup>イクチト云<sup>ヒ</sup>ナセリ」と解くように、「うくち」の語から「いくち」へと語形が変容していった証しとも云えるので、此のことばの移り変わりについては改めてその補正が必要となっていると考えてその詳細は別稿に記載する。

6370【庵室】「庵室／草庵」阿无之知・×／×・伊保

662【腰鼓】「胛鼓／腰鼓」三鼓／三乃豆々美

※十巻本は二字漢字表記し、廿巻本が万葉仮名で表記する。

705【偶人】「土偶人・木偶人」比度加太／人形

※逆に十巻本が万葉仮名表記し、廿巻本が二字漢字表記する。

# (7) 万葉仮名表記の字母異同〔七四語〕

187【稻魂】字加乃美多麻／字加乃美太萬

188【幸魂】佐歧太麻／佐歧太萬

201【天探女】阿末佐久女／阿萬佐久女

256【遊女】「夜發」也保知／夜保知

342【顧】「髑髏附」「髑髏」比度加之良／比止加之良

375【洩】「梯字附」「一／梯」波奈加无／波奈加無

388【吭】能无度布江／乃無止布江

392【髻】沼加々美／奴加々美

454【指】於与比／於與比

470【踝】豆不々之／豆布々之

501【兔缺】字久知／以久知

525【痿痺】「萎俚／萎婢」比留无夜末比／比留無夜末比

526【轉筋】古无良加倍利・加良須奈〔米〕理／古無良加倍利・加良須奈〔倍〕利

535【痔】之利乃夜万比／之利乃夜萬比

549【瘡瘍】「一／消渴」加知乃夜万比／加知乃也萬比

551【霍乱】「瘧乱／一」之利与理久智与理古久夜万比／之利與利久智與利古久夜萬比

607【馳射】於无毛能以流／於無毛乃以流

662【腰鼓】「胛鼓／腰鼓」三鼓／三乃豆々美

666【箏】「柱附」「一／箏」象乃古度／象乃古止

675【箏】比知利歧／比千利岐

677【籥】「一／高麗笛」古末布江／古萬布江

680【莫牟】万玖毛／萬久毛

6370【庵室】「一／草庵」阿无之知／伊保

6432【柩】「一／根」度万良／度萬良

6512【副車】比度太万比／比度大萬比

- 6566 【駁馬】「駁馬／」布知无万／布知無萬  
 6571 【鼻梁】波奈美祢／波奈美禰  
 6574 【排鞍肉】久良於歧止古路／久良於岐度古路  
 6575 【脊梁】世美祢／世美禰  
 6576 【承鐙肉】阿布弥須利／阿布美須利  
 6586 【嘶「鬻附」】以奈々久・布久利豆歧／以奈々久・布久利都岐  
 6578 【汗溝】阿勢美蘊／阿世美蘇  
 6580 【尾株】「／尾柱・尾根」乎保祢／乎保禰  
 6588 【蹄躡】「／痰」豆万以利／豆萬以利  
 6590 【腹瘡】多知波礼／多知波禮  
 6592 【腹轉病】波良夜无／波良夜無  
 6593 【驚】多利／太利  
 6626 【裏衣香】衣比／×
- 6924 【雲冠】万比乃加之良／萬比乃加之良  
 7025 【鐘】於保加祢／於保加禰  
 7044 【三衣匣】佐无江乃波古／佐無江乃波古  
 7057 【偶人】「／土偶人木偶人」比度加太／人形  
 7059 【紙錢】加美勢迹／加美勢禰  
 7182 【白粉】波布迹／波布禰  
 7208 【苞苴】阿良万歧／阿良萬岐  
 7214 【剪刀】毛能多知加太奈／毛乃多知加太奈  
 7299 【簪】「大簪」於保賀散／於保賀佐
- 7355 【鞭】无遲／無遲  
 7467 【銚子】佐之奈閑俗云佐須奈閑／佐之奈閑俗云佐須奈倍  
 7472 【鈔鑼】沙不良／沙布羅  
 7474 【金椀】「／碗」加奈万利／賀奈萬利  
 7509 【盆】「／瓮之缶」保度歧／保止岐  
 7554 【餉】加礼比／加禮比  
 7614 【臚】「／■」月＋簫「臚」阿閑豆久利／阿閑豆久利  
 7677 【菓蘆】久多毛乃／久太毛乃  
 7720 【栗刺】「／發附」栗刺伊賀／久利乃以加  
 7730 【胡瓜】岐宇利／木宇利  
 7816 【鶯鳥】「／鵲附」賀閑流波美／加閑流  
 7818 【卵】「／孵」加閑流／加倍流  
 7821 【孳尾】豆流比湏／都流比  
 7828 【鷹】「／黃鷹、撫鷹」和賀多加／和賀太加。加太加閑利  
 7847 【鴛子鳥】「／鵲附」阿止利／阿止里  
 7901 【羽「翥字附」】「／翥」波都々／波豆々  
 7962 【鼯鼠】无佐々比／無佐々比  
 7989 【魚】伊乎／伊遠  
 8004 【王餘魚】加礼比／加禮比  
 8048 【鱗】伊侶古／伊呂古

8052 【鱒】比礼／比禮8100 【甲】古布／古不8149 【寒蜩】「――蟪」加牟世美／加無世美8152 【夏蟲】奈都牟之／奈豆無之8346 【蒹藿】曾久止【字】／曾久止【久】8391 【竹】〔簞附〕太加无良・多可波良・多計／太加无良・

太加波良

8473 【石楠草】止比良乃岐・佐久奈无佐／止比良乃木・佐

久奈無佐

(7)に示した万葉仮名の字母が十卷本と廿卷本とにおいて異なる字母を用いて表記されている箇所だけを順に排列して示した。

「俗云」万葉仮名で表記する標記語一七九語の使用総数は、九一七字からなる。なかでも、「三字からなる語例として」、551

【霍乱】「霍乱／霍乱」の「之利与理久智与理古久夜万比」がある。此の語を含めて、現代の国語辞書のひとつ、『日本国語大

辞典』（以下『日国』）第二版（当該語の見出し語 には、『和名抄』の所載箇所を未載に取り扱って、真字体漢字（＝万葉仮名）

「之利与理久智与理古久夜万比」の語例も未載となっている。

次に長い和語としては、廿卷本だけが九字の290【母兄】×

／波良比止乃古乃加美があり、七字一語の6574【排鞍肉】久良

於歧止古路／久良於歧度古路。7214【剪刀】毛能多知加太奈／

毛乃多知加太奈。7512【盗】「盗器」×／之乃宇豆波毛乃。と続き、

六字・こ187【稻魂】 525【痿痺】 526【轉筋①・轉筋②】

535 【痔】 549 【疥癩】 607 【馳射】 658 【大鼓】 886 【局】6924 【雲冠】 7044 【三衣匣】 7627 【生薑】 の一二語

五字には201【天探女】 252【涉人】 342【顚】 388【吭】

500 【吃】 533 【蛭蟲】 546 【癲狂】 659 【揩鼓】 662 【腰鼓】6279 【殿】 6512 【副車】 6576 【承鐙肉】 6584 【陰脈】 6873 【炬】火】 6913 【帛】 7085 【書案】 7614 【臚】 7720 【栗刺】 7816 【鷺】鳥】 8379 【■】〔＋＋〕英】 8473 【石楠草】 の一二語

四字には176【雷公】 188【幸魂】 276【父母】 375【洩】

392【髻】 415【髻】 470【踝】 491【清盲】 524【脚氣】 538【癰】542 【産後腹】 548 【醺酒】 565 【浸淫瘡】 577 【奸】 596 【膿】630 【双六】 641 【拍浮】 675 【筆策】 6279 【殿】 6370 【庵室】6446 【闕】 6566 【駁馬】 6567 【驢馬】 6570 【驢】 6571 【鼻梁】6578 【汗溝】 6581 【烏頭】 6584 【陰脈】 6586 【斷】 6588 【蹄蹠】6590 【腹瘡】 6591 【脚病】 6592 【腹轉病】 6948 【裘】 7025 【鐘】7057 【偶人】 7059 【紙錢】 7060 【神籬】 7071 【瑞籬】 7185【黒齒】 7208 【苞苴】 7299 【簞】 7322 【鞍褥】 7343 【承鞋】7467 【銚子】 7474 【金椀】 7542 【漿】 7598 【臍】 7677 【菓蕨】7692 【鵞實】 7821 【琴尾】 7828 【鷹】 7962 【鼯鼠】 8149 【寒】

蜩】 8152 【夏蟲】 8346 【蒹藿】 8391 【竹】 の五七語

三字の24【霽】 256【遊女】 454【指】 465【膝軻】 471【踵】

477 【陰囊】 478 【陰核】 481 【月水】 492 【近目】 496 【雀盲】501 【兎缺】 552 【■】〔＋＋〕病】 561 【癰疽】 570 【贅】680 【莫牟】 6432 【枢】 6575 【脊梁】 6579 【歷草】 6580 【尾株】

6875【烽燧】 6990【糸鞋】 6998【草履】 7115【箭】 7171【斗】  
 7182【白粉】 7187【鑷子】 7302【行纏】 7340【鑷】 7342【轡】  
 7472【鈔鑷】 7493【碓】 7509【盆】 7554【餉】 7570【饅饅】  
 7571【鮓子】 7641【櫓】 7730【胡瓜】 7732【茄子】 7818【卵】  
 7847【鴛子鳥】 7901【羽】 8004【王餘魚】 8048【鱗】 8208【紫  
 菀（紫菀）】 8214【金錢花】の四五語

二字の 408【脛臍】 543【陰頰】 461【腕】 562【乳癰】  
 6370【庵室（廿卷本のみ）】 6481【腰】 6589【脊瘡】 6593【驚】  
 6615【瑠璃】 6626【裏衣香】 7020【浴室】 7040【鉢】 7047【袈  
 裟】 7049【衲】 7355【鞭】 7513【盃】 7532【醃】 7559【餚飣】  
 7586【蜜】 7711【枇杷】 7720【栗刺】 7924【遊牝】 7989【魚  
 8052【鱸】 8100【甲】の二五語

一字の 495【目翳】 567【癭瘻】 7888【鷗鷺】の三語  
 となる。

此れ等の語例は『日国』第二版の見出し語として、既に立項  
 されていることは、新たな語解析についての検証による見直し  
 に繋がる。

その結果が「俗云」下位の万葉仮名一九五語（廿卷本一七九語、  
 十卷本一五四語）で、延べ字母数は九一七字となる。

## 七二

これまで十卷本をベースにして、標記語における真字体漢字  
 の様相を窺うものであったのだが、廿卷本での字母の用いられ

方についても留意しながら、両本字母の異なりについても同時  
 に考察することを試みた（稿末の表2を参照願いたい）。

(1) 他語に用いていない孤例の字母については囲み枠印で示し  
 たところがあり、その語例について、さらに見定めて行くこと  
 で、よりその様相が窺える。

以下、万葉仮名の字母のなかで、□印で囲った字母漢字につ  
 いては、

①「可」字は、8391【竹】「篁」〈多可波良／太加波良〉で、  
 廿卷本が「加」字に変更。

②「玖」字は、680【莫牟】〈万玖毛／萬久毛〉で、廿卷本が「久」  
 字に変更。

③「散」字は、7299【簗】「大笠」〈於保賀散／於保賀佐〉で、  
 廿卷本が「佐」字に変更。

④「侶」字は、8048【鱗】〈伊侶古／伊呂古〉と「呂」の  
 字に変更。

とあって、十卷本が②「玖」③「散」④「侶」といった稀な字  
 母を用いている。此れを廿卷本が②「久」③「佐」④「呂」の  
 類用度の高い字母に意識的に置換えていることが窺える。

(2) 十卷本と廿卷本のかな表記が共通する語例としては、

- ⑤「計」字は、7187【鑷子】「鑷」計沼岐
- ⑥「胡」字は、6589【脊瘡】多胡
- ⑦「心」字は、565【浸淫瘡】心美佐字
- ⑧「爲」字は、6481【腰】爲流

⑨「兎」字は、7559【館銚】「麴麴」伏兎  
 ⑩「奴」字は、6913【帛】波久乃歧奴（392）【髻】沼加々美／奴加々美と同じ。

⑪「把」字は、7711【枇把】味把

⑫「味」字は、7711【枇把】味把

⑬「浮」字は、641【拍浮】於布頂

⑭「伏」字は、7559【館銚】「麴麴」伏兎

⑮「篇」字は、478【陰核】篇乃古

これ等⑤から⑮の字母を「万葉仮名」として用いる語例を見  
 ておくと、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに未載の字母  
 として⑦「心」⑮「篇」が『和名抄』には用いているというこ  
 とになる。山田孝雄博士は、狩谷核齋『改訂箋注倭名鈔訓纂』（川  
 瀬一馬旧蔵、架蔵本）のなかで、⑦「心ミサウ」浸淫瘡「二ノ  
 七五ウ」とし、「（シン）ミサウ」の訓みを記す。⑮「ヘノコ【陰  
 核】二ノ四六オ」として、字母「篇」を「へ」として用いる。  
 此れ以外に、廿卷本だけが仮名表記とする⑮から⑲の語例を  
 見る。次に示す。

⑯「軟」字は、8214【金錢花】「金錢」〈×／古無軟〉の語  
 をみる。廿卷本だけに見える此の字母「軟」については、

此れまでその検証は得られていない。言わば、此の標記語  
 を取り上げていなかったことに尽きる。

⑰「沙」字は、7472【鈔羅】沙不良／沙布羅と両本共に同じ。

⑱「也」字は、252【遊女】夜發也保知／夜保知で、字母「也」

は十卷本だけに記載する。

※「俗云」下位「や」の万葉仮名表記の字母「夜」は八例（十卷本）  
 と九例（廿卷本）となっていて、唯一、当該語「夜發」が字母「也」  
 で表記している。廿卷本が字母「夜」に変更した語例と見る。字  
 母「也」と「夜」は、廿卷本では、「也」一五一字、「夜」一六五字  
 が見えていて、國郡と職官の語例を除外すると「也」八字、「夜」  
 一二二字（標記語となっていて、複数使用の字母「夜」の語は、  
 ① 535「痔」② 552「■」〔ヅ＋疋＋巳〕病③ 6353「助鋪」④ 7115  
 「箭」⑤ 7380「魚梁」⑥ 8093「老海鼠」⑦ 8217「欺冬」⑧ 8492「寄  
 生」の八語に見えている。延べ語数で一一字が加えられ、一三三三  
 となる）と顕著な差異となっていて、字母「夜」を主流とする傾向  
 を茲に見定める。鈴木裕也（二〇二三）の調査報告の天治本『新撰  
 字鏡』での「也」一〇〇字、「夜」八字（「屋」九字）とは、真逆の  
 字母数となっている点を報告しておく。此の事由について、大いに  
 議論せねばなるまいが、今茲では結論づけることは保留としておく  
 ことにする。

⑲「遲」字は、7355【鞭】无遲／無遲と両本共に同じ。

⑳「蕪」字は、6578【汗溝】阿勢美蕪／阿世美蘇と扁旁逆  
 字の字母「蘇」で記載する。

※十卷本「蕪」字を廿卷本では「蘇」字と表記し、『古事記』『日本書紀』『万  
 葉集』の「蘇」字を用いるのに共通する（付記…室町後期写本断簡  
 の醍醐寺本も「蕪」字で記載する）。そして、「俗云」＋万葉仮名を  
 十卷本が「俗人＋万葉仮名」とする語例となっている。

②「飛」字は、6535「裕」久飛於保比／久飛於保比で「飛」(伊勢本・昌平本・高松宮本の古写本類)の字は「飛」字の省画体である。

※和語「くびおほひ」は、『和名抄』から記載がはじまり、此の語を継承するのは『字類抄』系から三卷本(久部前田本欠部↓黒川本)、十卷本『伊呂波字類抄』、七卷本『世俗字類抄』と限られ、江戸時代の『書言字考節用集』へと引き継ぎが見られるといったある種の特異語の一語となっている。

②「奴」字は、392「髻」沼加々美／奴加々美と「沼」字(他三例)を廿卷本は「奴」字に作る。

茲で、十卷本が逆に多く記載する字母「沼」を考察せねばなるまい。再度鈴木裕也(二〇二三)の『新撰字鏡』を見るに、字母「沼」は未記載とし、字母「奴」(六四例)とするからだ。『和名抄』(俗云)対校比だけではその実態が掴め難いので字母全体で示すと、廿卷本でも字母「沼」(五五例、このうち四例が十卷本未載の国郡例、卷十以降のみの語五一例)、字母「奴」(四七例)と拮抗する。特徴としては、字母「沼」にあり、卷十に697「欄」の「波之良沼岐」一例、卷十二に一八例(うち標記語6917「紵」の「阿佐沼乃」は俗用の表に記載参照)、卷十三に一例、卷十四に八例、卷十五に三例、卷十六に一例、卷十七に四例、卷十八に四例、卷十九に三例、卷廿に八例となるうか。こうしたなかで、字母「沼」から「奴」への移行語例として「ぬかがみ」は、十卷本が字母「沼」を廿卷本が字母「奴」

とした語例となっていて、次に示す二種で『和名抄』の語訓を見てわかるように、此の語例と28「儷」の語に限られていて、逆に標記語7674「香」7779「蓴」8270「狗尾草」8347「荳」845「釣」の五例については十卷本の字母「奴」で、廿卷本が「沼」とする点で両字母が『和名抄』のなかで同時に両用されていると見て良からう。廿卷本が「沼」と切り替え表記があつて、その両用性を如実に示すものとなっている。

〔前文例は十卷本「十」、後文例は廿卷本「廿」として記載して示すことにした〕

「十」儷兒 楊氏漢語抄云儷兒「沼」比止上他侯反「辨」色立成云不良人

「廿」儷兒 世説云園中夜呵云有儷兒「他侯反」儷兒「和名」奴比止「窃」盜「和名」美曾加奴比止「一云不良人也

「十」髻 唐韻云髻「音拂沼加々美」額前髮也

「廿」髻 唐韻云髻「私反俗云奴加々美」額前髮也

「十」香菜 楊氏漢語抄云香菜「音柔以奴江」一云水蘊

「廿」香菜 楊氏漢語抄云香菜「音柔」和名「以沼衣」一云水蘊

〔今案所出未詳〕

「十」蓴 ①蓴敬曰蓴「視」倫反「奴」奈波「別」有根々不充食

⑥自三四月至七八月「通」名「絲」蓴味甜軟霜降以後至二月名環蓴味苦躰洪者也

「廿」蓴 ①野王案云蓴「視」倫反「和」名「沼」奈波「水菜也



①蘇敬本草注云⑥自三四月至七八月⑦通名⑧絲蓴味甜体軟霜降以後至二月名環蓴味苦体渋

此の「蓴」の語については、語の構造解析を試みて、既にBAND別稿で①から⑧の数字で各々の注記語について説明する。因みに、①典拠書名。②反切。③「和名」。④万葉仮名。⑤意義注。⑥時季。⑦「通名」。⑧意義説明注となる。

※十巻本では「蓴敬曰」とするが、廿巻本では「野王案云」と典拠書名を変改させている。そして十巻本の「蓴敬曰」を意義注「水菜也」のあとに「蘇敬本草注云」と書名を加えて⑥の月の経過注記を記載する形式とする。⑦「通名」以後の⑧の意義注記は略共通する。①典拠書名、③和名を増補とし、⑤「別有根々不充食」を削ると云ったかなり大きな変改構成をなし得ている。

⑩獨尾草 弁色立成云獨尾草「惠奴乃古久散」

⑫獨尾草 辨色立成云獨尾草「惠沼能古久佐」

⑩薺草 陶隱居 云薺草「上音紅」一名遊龍「伊奴太天」

⑫薺草 陶隱居本草注云薺草一名遊龍「薺音紅和名伊沼多天」

⑩釣樟 本中云釣樟一名鳥樟「音章」久沼岐

⑫釣樟 本草云釣樟一名鳥樟「音章」和名「久沼木」

⑩舉樹 本中云舉樹「久奴岐」日本紀私記云歷木

⑫舉樹 本草云舉樹「和名」久沼木「日本紀私記云歷木

※草木部木類という同じ分類中に二種の標記語がある「釣樟」および「舉

樹」を排列していて、その事由については輔仁編『本草和名』下巻「二ウ」「釣樟根皮」と「舉樹皮」の和名「奈美久奴岐」を参照にしていたことが根元にあることを吾人が調査したなかで明らかにしている。和語「くぬき」の万葉仮名表記は十巻本が二種標記語において「沼」と「奴」とを用いていて揺れていることが見て取れる。此の揺れを廿巻本では「沼」で統べて記載する。

⑩蛻 野王案云蛻「如説反一音税訓毛奴久」蟬之解皮也

也本草云蛻一名龍子衣「倍美乃毛沼介」

⑫蛻 野王案蛻「始悦反音税訓毛沼久」蟬蛇之解皮也

本草云蛇蛻一名龍子衣「和名」倍美乃毛奴介

※「ぬ」の字母で、標記語「蛻」は十巻本「毛奴久」、廿巻本「毛沼久」とし、附語「蛇蛻」では、十巻本が「倍美乃毛沼介」で「沼」、十巻本「倍美乃毛奴介」の字母に「奴」、廿巻本が「沼」と切り替え表記があつて、その両用性を如実に示すものとなっている。

二字以上を以て表記する真字体漢字表記についても見定めておくところだが、敢えて茲には稽查検証を記載しなかった。だが、特出しておくべき語について述べておくと、標記語7730「胡瓜」の字母「木」は、十巻本が字母「歧」字で記載するのを、廿巻本では「木字利」他二七六語に用いている。此の一連の検証が山田健三(二〇一二)が云う「分析対象の精緻観察から、仮名字母の違いが意味をもつとする解釈も生れる」への立証に繋がればと考え、『和名抄』凡ての字母語解析については、このあとの稽查報告に譲ることにするが、抽出語解析からも両本

の字母表記について明らかにできたことは今後の字母研究に受け継いで行けることになろう。

## 八 「俗云」下位部の意義注文

「俗云」の下位部を標記語の意味説明で示す語例は総数二七例、十巻本のみ六例、廿巻本のみ八例、両本共通する一三例からなる。茲で留意すべきことは、

十巻本が「俗云」として意義説明をするのに対し、廿巻本が別用語にする…476「玉莖」7206「杵」7320「鞍」7491「擧」

廿巻本が「俗云」として意義説明するのに対し、十巻本が別用語にする…7555「餅」7585「乳麴」

と云った六語の異同について、茲でも一方が「俗云」としているのを「此間云」とする標記語「杵」／「餅」「乳麴」三語をどう見極めるかになってくる。

同じ用語が両本それぞれにあって、同編者の源順が意図的に置換えをなし得ていたとすれば、その置換えにはある種の意図があったことを読み解くことになる。

### (1) 標記語「杵」の下位は

〔十〕朱漆の「鼓杵」、黒漆の「鼓杵」は是也

〔廿〕朱漆の「盤」、黒漆の「盤」は是也

(2) 標記語「餅」の下位は「餅粉阿礼是也／餅粉阿禮是也」

(3) 標記語「乳麴」の下位は「乳脯是／乳脯是也」

と孰れも下位の意義づけは略共通していることから、編者源順による両用語の差異意識を想定して良いことになり、(1)については、先ず「鼓」を付記する乃至削除すると想定し、「パン」を「杵」とそのまま用いる「盤」字に変更して説明する。

〔ノ〕符号前部文言は十巻本、後部文言は廿巻本を示している。

鍛冶 〈×〉冶 焼鐵銷鏢也

〔俗云〕鍛冶訛也焼鐵銷鏢也

玉莖 〔俗云〕或以此字為男陰以開字為女陰其說未詳

〔俗人〕或以此字為男陰以開字為女陰其說未詳

堂〔名附〕×

〔俗云〕猶堂高頭壇也出

邸家 〔俗云〕津屋此類也停賣物取賃處也

〔俗云〕人可謂 停売 取賃處也〔和名津屋〕

店家 〔俗云〕町此類也坐賣舍也

〔俗云〕東西町是也

壇 〔俗云〕本音之濁封土四方而高也

〔俗云〕本音之濁封土四方而高也

楸 〔俗云〕巾子形所以止扇也

〔俗云〕巾子形所以止扇也

長簷車 〔俗云〕庇刺車是乎

〔俗云〕庇刺車是乎

車簾 〔俗云〕車簾車帷也

〔俗云〕車簾車帷也

連錢驄 〔俗云〕連錢葦毛是

〔俗云〕連錢葦毛是

騶〔莖附〕〔俗云〕葦毛是青白如莖色也

三鉗

〔俗〕云 葦毛是」青白如莢色也

〔俗〕云 上声之輕」／

〔俗〕云 平聲之輕」※十卷本と廿卷本差声を異にする。

梓

〔俗〕云 朱漆鼓梓黒漆鼓梓是也」／

〔此間〕云 朱漆盤 黒漆盤 是也

簍

〔俗〕云 本音之重」収糸者也」／

〔俗〕云 本音之重」収糸者也

鞍

〔俗〕云 有唐鞍移鞍結鞍等名」馬鞍也」／

〔附〕俗 有唐鞍移鞍結鞍等名」馬鞍也

韉

〔韉附〕〔俗〕云 駒韉坎」韉之短也」／〔俗〕云 駒韉歟」韉之短也

也

杏葉

〔俗〕云 行衣布」／〔俗〕云 行衣布」

鎗

〔俗〕云 非飫而所炊之飯謂之鎗飯者音訛也」

小鼎也」／

〔今案〕〔俗説〕非飫而所炊之飯謂之鎗飯鎗音如唐是

愚者偏見當字在旁所讀傳歟」小鼎也

櫻

〔俗〕云 臺是」圓案也」／〔俗〕云 臺是」圓案也

〔俗〕云 中取是也」昇食器也」／

餅

〔俗所〕謂中取是也」昇食器也

〔殍字〕〔此間〕餅粉阿礼是也」／

〔俗〕云 餅粉阿禮是也」

乳麤

〔此間〕乳脯是」／

〔俗〕云 乳脯是也」

冬桃

〔俗〕云 霜桃是也」／

〔今案冬桃〕〔俗〕所謂〔××〕霜桃是」

畜

〔××〕介多毛乃」牛馬羊犬鷄豕也」／

菊

〔俗〕云 畜生如軸生二音和名」牛馬羊犬鷄豕也

〔××〕×日精中も也」／〔俗〕云 本音之重」日精草也

萱草

〔××〕××」／〔俗〕云 如環藻二音」

兩節間

〔××〕××」／〔俗〕云 與故以舉之」

〔俗〕云の用法については、新野直哉（一九八六）が此の語解析の切り拓きを進め、「俗〕云」の上位部と下位部の関係を元和版で最初に取り組んでいて参照すべき点は大いにあった。吾人は、十卷本と廿卷本の対校を許に、とりわけ下位部語例に着目して見てきた。その結果、編者源順は標記語を注解するなかで、変改させた箇所が二系統の『和名抄』を対校一覧にすることによりその特徴が明らかにできたことを述べておきたい。（補助関連データ〔Excel版データ〕を参照願いたい。）

九 「俗説」六語

〔俗説〕の用語は、廿卷本に六語（1）664「琴」〔絃徽等附〕。（2）6880「蚊火」。（3）7469「鎗」。（4）7572「歡喜團」。（5）7828「鷹」。（6）8083「錦貝」）に見え、十卷本では（1）（2）を欠き、（3）については、十卷本が前節でも取り上げた「俗〕云」に関わり、此の「俗〕用語の異同についての焦点となる。（「俗説〕六語の付属資料〔Excel版データ〕を参照願いたい。）

## (1) 「琴」の語注記

〔十〕琴「絃▼徽等附」唐韻云琴「巨金反」樂器神農作之本五絃周文王加二絃「音与弦同古度乃乎樂有絃者皆用之」※「徽附」×

〔廿〕琴 帝王世説云炎帝作五絃琴世本云神農作之琴操云伏羲作之以具宮商角徵羽至於周文王增二絃一説云文王武王各加一絃「音與弦同和名古止乃乎」文選琴賦云徽以鍾山之玉「今案俗説琴体有龍池鳳池龍舌龍尾蜂腰鳳足弦門絃納古人肩等名」

十卷本では、此の語注記の末尾「ガク琴ゲン有るは皆、之れをもち用ゐる」を加ふといふ」とし、「シユウ周の文王が二絃」のあとに割り注「①反切②和名「古度乃乎」としているが、廿卷本では③語意「一説云文王武王各加一絃」の一文を削り、代わって「樂有絃者皆用之」の一文を添え、さらに新たな語文を加筆記載する。「『文選』琴の賦に云く、徽とするシヨウザンに鍾山のへ之玉ギョクを以す」として、割り注「今案るに、俗説に、琴體に①龍池、②鳳池、③龍舌、④龍尾、⑤蜂腰、⑥鳳足、⑦弦門、⑧絃納、⑨古一人肩等の名有り」（訓読は此れまでと同じく語解析作業のなかで筆者が便宜的に行つた。以下同じ。）を記載し、言わば別途に整えた新たな典拠書名『文選』琴の賦を挙げ、その琴体固有の名九つを列ねた一文を記載する。茲に「俗説」の語を用いているのだが、①龍池と②鳳池は背面、

③龍舌は頭部、④龍尾は尾部、⑤蜂腰は腰部、⑥鳳足は絃を通す足部、⑦弦門は絃が通る所、⑧絃納は字の如く絃を納めるところ、⑨古人肩は肩の部となつて裝飾美の根幹を象つていて、当代の雅やかさに欠かせない重要な用語となつてゐる。

## (2) 「蚊火」の語注記

〔十〕蚊火 ×

※『新撰萬葉集』『夏歌十九』（天理図書館蔵）

○夏草之繁杵思者蚊遣火之下丹而已許曾燃巨藝礼

〔廿〕蚊火 新撰萬葉集歌云蚊遣火「加夜利比」今案一云蚊火所出未詳但俗説蚊遇煙即去仍夏日庭中熏火放煙故以名之蚊見蟲多部」

十卷本には当該標記語「蚊火」は未収載にする。廿卷本に「但し、俗説に、蚊煙けむりに遇ふ。即ち去る。仍て夏日庭中に火を熏し煙を放つ。故に以て之く名づく。蚊かは、蟲多部」に見える」と記載する。

## (3) 「鎗」の語注記

〔十〕鎗 唐韻云鎗「音楚庚反字亦作鎗阿之奈倍或説云俗云非甌而所炊之飯謂之鎗飯者音訛也」小鼎也鏹「即遙反」温器三足有柄也

〔廿〕鎗 唐韻云鎗「音倉字亦作鎗漢語抄云阿之奈倍今案俗説非甌而所炊之飯謂之鎗飯鎗音如唐是愚者偏見當字在旁所讀傳歟」小鼎也鏹「即遙反」温器三足有柄也

仍ち、「俗云」と「俗説」との編纂での相異にも繋がって  
いて、「音訛也」と説いた箇所を「鑑音如唐是愚者偏見當  
字在旁所讀傳歟」(「鑑」は音「唐」、是れ愚者の偏見の  
如し。「當」の字は旁に在り。讀み傳る所か(歟)とする。  
陳州司馬孫愐『唐韻』(龍谷大写真文庫蔵)には、「庚十二  
鑑 楚庚切／鼎類四 鑑 俗本音當」と記載が見える。

(4) 「歡喜團」の語注記

〔十〕歡喜團 楊氏漢語抄云歡喜團「以品甘物爲之或説云一  
名團喜今案俗説梅枝桃枝餠餠桂心黏臍饅饅子團喜謂之八  
種唐菓子其有所見者已舉於上文」

〔廿〕歡喜團 楊氏漢語抄云歡喜團「以品甘物爲之或説云一  
名團喜今案俗説梅枝桃枝餠餠桂心黏臍饅饅子團喜謂之八  
種唐菓子其有所見者已舉於上文」

両本は共通している。此れを後の古辞書『字類抄』系が継  
承して、さらに時代は降るが、掖齋が『倭名類聚抄箋註』  
注解の引用書目の一書に挙げている『厨事類記』一二九五  
(永仁三)年卷下一軸寫本(慶應義塾大学魚菜文庫蔵)に  
も唐菓子八種の名が見え、その記載が見える。江戸元禄  
十二代所蔵者紀宗恒による書込み部分として、『和名抄』「餠  
餠」「歡喜團」条の訓読記載が見えていて、『和名抄』の鎌  
倉期から江戸時代に跨がるそのことばの継承性を知る手が  
かりとなる。そのうえで貴重な資料の一つとなっている。

(5) 「鷹」の語注記

〔十〕鷹 廣雅云一歳名之黃鷹「音鷹和賀多加」二歳名之撫  
太加閑利」三歳名之青鷹白鷹「漢語抄云大鷹於保太加兄鷹  
勢字今案俗説雄鷹謂之光鷹雌鷹謂之火鷹也」

〔廿〕鷹 廣雅云一歳名之黃鷹「俗云和賀太加」二歳名之撫  
鷹「俗云加太加閑利」三歳名之青鷹白鷹「今案青白随色名  
之俗説鷹白者不論雌雄皆名之良太賀不論青白大者皆名於保  
太加小者皆名勢字漢語抄用兄鷹二字爲名所出未詳俗説雄鷹  
謂之兄鷹雌鷹謂之大鷹也」

「鷹」では、「光」と「兄」の字形相似による書写となつて  
いる。では、どちらが正しい名称かと考えていくとき、「雄  
鷹」を別名で「光鷹」というか「兄鷹」というかを検証す  
ることが必要となる。『和名抄』標記語「鵠」に十卷本卷  
七に「鵠兼名苑云鵠(音遙)一名鵠(諸延反)鵠也野王  
案鵠(音遙漢語抄云波之太加又兄鵠古能利)似鷹而小  
也」とあり、他資料としては「鷹詞」のなかに、「兄鷹、  
鵠、兄鷹、乙鷹、隼といふに定め、鷹は雌の方がいづれ  
も大きい。「このり」は鵠の雄、「はいゑのさいたか」は「こ  
のり」の雌、「せう」は大鷹の雄、「おほたか」は「兄鷹」  
の雌、「雀鵠」は雄、「つみ」は「雀鵠」の雌、「さしば」は「隼」  
の雄、隼は「さしば」の雌である。また同じ鷹でも鷹飼の  
方では一年経たのを「ひととや」といひ、二年経たのを「片  
かへり」、三年経たのを「諸かへり」、四年経たのを「諸片  
かへり」、四年以上は單に「とやかへり」と云う」とあつて、



廿卷本表記の「兄鷹」が正しい語になる。訓みは「せう」、「このり」とする。

(6) 「錦貝」の語注記

〔十〕錦貝 弁色立成云錦貝「夜久乃斑貝今案俗説云紅螺杯  
出西海益救嶋故俗呼為益救貝」

〔廿〕錦貝 辨色立成云錦貝「夜久乃斑貝今案本文未詳但俗  
説西海有夜久島彼島所出也」

「錦貝」では、『弁色立成』に標記語「錦貝」は、「和名」を「夜久乃斑貝」と云ふ。今案ふるに、本説に「紅螺杯」は西海の益救嶋／夜久島に有り」とし、その後の文言を「益救嶋」と「夜久島」と云った産出する地名の表記に異同が見えていて、「益救貝」とその別表記の名「夜久貝」の語については未記載にし、ただ、「彼島に所出するなり〔也〕」と彼地からの新たな情報を得て茲に補正記載している。

此れ等六語に於いては、十巻本と廿巻本共に「俗説」の用語を用いているのは(4)「歡喜團」(5)「鷹」(6)「錦貝」の三語であり、此れに廿巻本は(1)「琴」(2)「蚊火」(3)「鎗」の語に「俗説」を用いている。ただ、(3)「鎗」には十巻本が「俗云」としている箇所になっていたりもする。各々の語解の詳細については、筆者まとめの『和名抄』語解析の調査録(BAND)に掲載して公開、二〇二三年から現在進行中)を参照されたい。

その上で、二「俗用」の標記語、三「俗用」下位部注記、四

注記「今呼」と「俗呼」の標記語「専」、五「俗云」について、六「俗云」二系統本対校一覽、七「俗云」下位部真字体漢字(『万葉仮名』表記、八「俗云」下位部の意義注文、九「俗説」の点に細分して検証してみたが、九つの観点のなかにも各々が輻輳している語もあり、此れ等を総合的に判断するとき、吾人は十巻本が先ず公主勤仕内親王に奏納され、内親王の管理下から離れて、その数十年の月日を重ねていく間に編者源順自身が改編増補となる廿巻本に仕立て直したと見られる幾つかの点を「俗」の用法から浮き彫りにしてみた。そこに至るうえで、先学諸研究者方々による各々の観点からのご指摘内容を踏まえ、両本のデータベース対校の資料化を吾人自身整えつつあり、此のデータベースを今後さらに発展活用して、再度各々の目標に応じて、語注記内容を精査していくことが求められている。此れにより語解析での更なる精緻さを求めていくなかで、とりわけ宮澤俊雅(二〇一〇)所載の『和名抄』一連のご論考は最も正鵠を射ていると見定めている。茲には名を挙げずに失礼している方々、更には新たに進めて行く志のある方々にとつての橋渡しとなるご報告としておきたい。吾人の標記語とその注記語の語解は今現在三〇〇余語となりつつあるが、今後も此の作業を日々続けていくことになる。

# 十 まとめ

已上を以て、『和名抄』の語注記「俗」について語解析して



きた報告書とする。

実際、『和名抄』中に於ける「俗○」の記載には、茲に取り上げた「俗用」「俗呼」「俗云」「俗説」の四種の用語があり、各々連関する「此間」「今」などの用語との接点を鑑みながら見定めて行くとき、此等の用語自体が漢籍語の用例にも見えていて、その文例を茲に引用することもあるなかで、本邦使用の語例としても同じく展開を深めてきたものと見ておくことが肝要かと思う。

なかでも、「俗」の用法については、「今」や「今案」などの時間軸をより狭めて人々に説く技法などが見られ、その叙述技法は現代の吾人達の日常のなかにも受け継がれ、用いられてきたと見ている。此の「今案俗云」などの様式は、語の注記を解説するなかで、必要不可欠な一用法だったのではと考えている。

さらに、最初に示した「俗用」の様式の使用例数は『和名抄』全体から見た時さほど多くはないが、漢式和文注解にとつては欠かせない語のひとつとなっていることが見て取れる。実際、漢式和文では熟語のように記述されていても、和式訓読の表現にして見たときには「俗に○○と用いる」との間に主目の実語を置くことでその用法を分断する用語の形態となっていることにもよる。このこと自体が現代人の目には和式体の漢文表記法であって、訓読のために返読符号を添えてもまだ訓みにくいものとなってきたいて、此れを承けてその和らげがより必要視されてきている。此れに拍車が懸かれれば、現代語訳を用いなければ

ば、この手の資料が全く一部の人にしか読めないほどわかりにくいところまでできているように思えてならない。だが、何時の時代も此れに似た和文と真字文との壁を巡って、波の打ち返しがあがり、かな文は真字文に変改され、真字文はかな和文に変改されると云ったよりもどしどしが常に繰り返されてきたことが日本語文の成り立ちのうえで、其々に影響しあつてきたと考えている。その真字文の特性は、漢語に似て漢語とは異なる視覚性化の文字に依つて用いられてきている。例えば、七字に挙げた和語を「しのうつはもの」とかな表記だけで記載するのではなく、「之乃<sup>し</sup>字豆波毛乃<sup>し</sup>」として見るとき、二拍目と三拍目に用いた字母「乃」表記がかな表記「の」で共通することから、準体助詞「の」と名詞「もの」の「の」であれ、「の」を「乃」字で表示することが行われていて、標記語「盗器」を明確に定めることに繋がっていたりする。ただ、此の語が廿卷本系だけに見えるものとなっていることも指摘しておかねばなるまい。

特に、「俗云」の下位語として、真字体漢字（Ⅱ万葉仮名）を用いて表現した右の一六五語の語例は、言わば此の真字体漢字を用いて精確に伝えるために成し得てきた技法用語の表象としての特徴とも言える。編者源順には、「和名」と呼称するのだが、「和字（やまとな）」としての「かな文字」表記を一切用いずに、漢式の真字（Ⅱ万葉仮名）だけで伝えようとした国風暗黒時代の真つ只中から次に移行行く時のなかで「漢風<sup>からぶり</sup>」と「国風<sup>くにぶり</sup>」の結び付けが本書の編まれていくのに必要不可欠で且つ斬新性を

伴った、濱田敦氏のことば（濱田敦一九九八・三四五頁）を借りて云うと、標記語「鮠」の注記「今案俗用『鮠字』非也」をあげて説く「俗用漢語辞書」への歩みだしを表象して見えていることに尽きる。その万葉仮名の手法が『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』などの上代文献資料を訓みなすなかで編まれた日本語の表記法として、此れが源順の同時代の『新撰万葉集』に至るまで常用の表記法であったのであればこそ、真名体漢字表記＝万葉仮名表記の全語の実態把握が今後必要となろう。源順自身は、その時代を代表する学識文人として、「和名」と書名を成す上で、その表記体の利用方法をどのような規範意識をもって受け入れていたのだろうかと吾人は目を向けてみている。そこには源順の編者ならではの苦作の意図が窺えるのではないかと考えて、『和名抄』に見る「俗」の用法「俗云」の下位部に置く真字体漢字表記での和語を十卷本と廿卷本との二系統伝本の記載内容を以て比較対校しながら、その特徴を十分に捉えられたとは言えないのだが幾つかの調査結果を得たところにある。真字体漢字を五十音図化したとき、『和名抄』が示した「万葉仮名」がはじめて明らかになってくることも考慮しつつ、字母から見る語例について吾人自身、『和名抄』の一部を基底とした検証報告として成し得たと考えている。

その結果、十卷本と廿卷本の二系統『和名抄』の編纂作業の過程が十卷本撰述を先にしている、此れを増補改訂編纂した廿卷本が成立したと決定づける標記語に於ける語注記のなかで、

「俗」の用法を以て、語注記内容を対校検証したものとして茲に示すものとなった。

今後は、『和名抄』の語注記を万葉仮名の字母だけでなく、更なる「是者」（唐代以前漢籍四九五点（三二九三語）と本邦真名資料「是」の用法）などの観点からも稽查していくことに努めていきたい。

## 注

(1) 『和名抄』の所載語数は、次の通りである。

十卷本 総数 2578 語＋第類部15 語＝2593 語

廿卷本 総数 8211 語－国郡部5263 語＝3148 語

※514 語 両系統での差異を示す基準値となる。ただし、各々に特有標記語がある。

※上の総数は、あくまで二〇二三年三月時点の調査対象に基づくものであり、多少の変動が今後ありうるものと記載する。

(2) 「さけ【鮠】」 <https://researchmap.jp/wyisyg/file/download/44544/436833>  
(二〇二五年五月確認)

さけ【鮠】→【鮠】 魚名 北海道では「しやけ」と呼称するが、江戸時代の『かたこと』では、その名となる語源説明をしていて「さけ」の訓みを貫く。また、『和名抄』から平安時代後期まで標記字「鮠」と「鮠」とが揺れていて、『新撰字鏡』は「鮠」字、『和名抄』は「鮠」字と二分するなか、『字類抄』『名義抄』に両語形を記載するものの、意味上の異なりが明らかとなっている。その表記漢字の流れは近代語国語辞書、そして、現在の国語辞書に持ち越されてきている。

《語解析引用リスト》(二〇二三年三月四日報告分)

陽鳥（八咫鳥）001-02。月001-03。望月001-05。虹蜺。暈001-06。蝕

001-07。星 001-08。明星 001-09。長庚 001-10。牽牛 001-11。織女 001-12。彗星 001-14。天河 001-16。霞 002-02。霖 002-07。風 003-01。雪 003-07。拈棒 009-11。温泉 [流黄附] 010-18。雷公 016-06。稻魂 016-17。幸魂 016-18。現人神 016-19。幣。婦人 018-07。負 019-06。奴僕 022-10。婢 022-11。遊女 023-02。朋友 (十卷 197)。蟬谷 030-07。髮髮 033-02。疾病。兎唇 040-16。譚誕 040-30。種 040-42。照射 042-08。筭篋 047-08。日理 094-16。倉廩 136-21。庫 136-22。土蔵。邸屋 136-27。窖 (十卷本)。橋 143-01。石橋 143-02。浮橋 143-03。土橋 143-04。獨梁 143-05。柵 145-10。腰輿 146-03。騅 [莢附] 149-12。金 152-01。炬火 156-04。烽燧 156-06。野火 156-08。薪 157-07。竈 158-08。錦 159-01。紳 165-01。寶鐸 169-07。鉢 171-08。龍眼木 172-02。炙函 182-04。黄櫨 184-02。機 185-01。織複 185-10。革。麻亭 185-11。璽 186-01。茵 188-10。疊子 202。鏡 201。櫃 203-02。杓 (瓢) 203-13。甕 204-03。罍 204-11。箱 (筐) 205-03。簞 205-05。箬籬 205-10。酒 206-01。酎酒 206-06。肴 206-13。漿 207-01。糗餅 208-12。粬糲 209-07。藥 (十卷本 011-051)。山葵 214-07。穀 (五穀) 215-04。藥 209-02。林檎 221-19。酸棗 221-26。烏芋 224-06。大凝菜 (心太) 226-13。鹿尾菜 226-15。菟蓐 228-09。牛蒡 229-13。鬼皂莢 229-14。雲雀 231-46。鵲 231-61。猿 234-21。狐 234-22。鼯鼠 234-35。■鼠 (土竜) 234-37。鱧魚 236-26。河豚。■魚 (黑鯛) 236-18。■魚 (鰻) 236-28。龜 238-01。蚱蜢 240-19。才。欸冬 242-14。蒲公英 242-54。烏草樹 248-64。及 [242-97。王孫 242。131。筍 243-01。藤 245-02。竹 (簞) 246-01。楊 248-14。枝條 249-03。

(3) 「分毫字樣」については筆者が纏めた資料以外にも、『干禄字書』『五經文字』『敦煌出土 S388 字樣』などによる正俗字の考察がなされていて「正字」が、

「所謂正者、竝有憑據、可以施著述文章對策碑碣、將為允當(進士考試理宜必遵正體、明經對策貴合經注本文、碑書多作八分任別詢舊則) (干禄、序文) 詁文：所謂「正」とは、拠所があつて、著述・文章・

官吏登用試験の答案・石碑に用いるべき字形(以下略す)」

であつて、纏て本邦古辞書類にも『字類抄』そして室町時代の『下學集』『節用集』類にその継承が見られるものとなっている。また「俗字」を主目的にした『世俗字類抄』や江戸期になると『俗字類聚』『筆海俗字指南車』と云う書名に「俗字」の用語を標目にした字書類が編纂されてきている。

(4) 『爾雅翼』(南宋の羅願撰) 四庫全書本を参照。

(5) 資料『日本私記』(田氏私記、延喜講筵(九〇四・九〇六)以前に成る)について、西宮一民(一九六九)を参照した。影印資料は、早稲田大学図書館蔵を用いた。

(6) 「專」字の和訓「もはら」については、上代『万葉集』『風土記』他資料にも和訓「もはら」は未収載の語で、最古の語例は、正倉院聖語藏本『大乘大集地藏十輪經』卷七、元慶七(八八三)年訓点(中田祝夫一九七九：二四頁35行)に、

【原文】我説是人<sup>レ</sup>不護三業<sup>レ</sup>專行惡行妄号大乘實於三乘皆非法器

【翻刻】我<sup>レ</sup>【説】是の人は三業を護(ら)不、專<sup>ラ</sup>惡行を行じて、妄て大乘と号して、実に三乘に「於て、皆、法器に非ずと説ク。  
※他に同書卷九「モハラ」の訓ありとする。

とする。廿卷本『和名抄』成立の九三四(承平四)年以前の例と成っている。更に、文学資料については、和語「もはら」の語は上代『万葉集』には無く、平安朝作品では『古今集』一例、『竹取物語』一例、『伊勢物語』一例、『土左日記』一例、『蜻蛉日記』一例、『落窪物語』三例、『宇津保物語』二例(一一〇・一一三・一二八)、『源氏物語』五例となつていて、当に平安朝時代語の一例に算える。

(7) 『和名抄』に於ける「此間云」の用語は、総数八四例(十卷本のみ二六例、廿卷本のみ八例)が見えていて両本共に用いられる語数は五〇例に及ぶ。残り三四例のなかで、「此間云」を「世間云」に置き換えたのが八例、次に「俗云」が「一餅」[筍字附] 2乳麴3蜜4黄菜5遊牝6旃檀7極枋」の七例あり、その一例が此の「旃檀」の語となる。此の逆もあつて、廿

巻本が「此間云」に対し、十巻本が「俗云」とする「1圓座2枇杷3蒴藿」の三例も確認している。

(8) 「十三字母」の語例として、他に標記語「炙函」に「宇流之奴利乃夜岐之留乃都奉」がある（小学館『日国』第二版には、同じく未収載の語となっている）。

(9) 山田孝雄博士著『倭名類聚鈔考證附録／改訂箋注倭名鈔訓纂』合一冊（川瀬一馬旧蔵・架蔵本）は、国文学研究資料館「川瀬一馬蔵書」にも同一刷り本が蔵書されていて、所蔵者川瀬氏の書込みのない資料であることを確認している。架蔵の書には合の前末に「掖齋自筆稿本／本書の原本今家蔵す、安田一氏より所惠古辞書研究資料の一なり、昭和十五年六月／川瀬一馬[宋印]」があり、原本家蔵とあるが、掖齋翁手稿本（大槻文彦博士蔵）を謄写し整理した（大正八年二月十八日原本謄写同四月十日書之了／山田孝雄）資料は、現在、国文学研究資料館からも未確認にある。

(10) 「金錢花」廿巻本の語注記に、「金錢は俗に古無軟と云ふ」（訓読して示すと「コムゼン」で「ン」を無表記し「コムゼ」とも見るか）と記載を見る。茲で、真名体漢字表記（『万葉仮名』「古無軟」をこれまで検証されずにきていると言いた。「和名」という用語を用いずに「俗に○○と云ふ」形式として記載する点を考慮しておきたい。また、小学館『日国』第二版の当該語の見出し語、「補遺」、此れに『古辞書』と『表記』の欄からは、『和名抄』を示す「和名」の語が漏れていることを指摘しておきたい。そのうえで、万葉仮名「古無軟」の語例を考察しておく、現行国語辞書の標記語「金錢」を繙くとき「キンセン」ではなく、見出し語「コゼン」で、廿巻本『和名抄』から当該語を引用し、意義説明に植物名とし、後の古辞書の観智院本『類聚名義抄』（艸部八一・僧上五2）や江戸時代の『和漢三才図会』巻九四濕草（5ウ）が再度此の訓を所載する。俗用「古無軟」の語例となる。単字「金」を「古無」と一拍で単漢字「金」呉音「コン」、「軟」呉音「ネン」、漢音「ゼン」で、慣用音「ナン」なの

で「古無軟」の語は呉音と漢音の混淆音「コムゼンクワ」（平安末の『字類抄』（前田本）の注記訓には「俗」と下位部に添えていて「コムゼンクワ」「平・上・上・上・上・上」（巻下古部植物門二ウ（二五〇頁）3）」とカナ訓表記で所載する）となっている。「万葉仮名」として、「難」字が『万葉集』巻第一・五七八番「左散難弥乃」に「難」や「奈伎和多里南牟」の「南」が用いられているように、当該字「軟」は漢音「ゼン」であり、字母として本書でも孤例のものとなっている。ある意味で、「古無軟」の語は別に参考した証例を見出せない限り、源順自身が「金錢」に選択した字母「軟」字と見ておくことになる。高田智和・矢田勉・斎藤達哉（二〇一五）にも未収載の「せ（ぜ）」字母例として見定めておく。

また、山田孝雄（一九七〇・二八七頁）が示したように、「和名抄」草木部には、「芭蕉」「發勢乎波」「地黄」「蒴藿」「曾久止久」「烏頭」「附子」「旃檀」「俗云善短」「紫檀」「白檀」「樺枋」「枸杞」「櫻櫚」「木欒子」「無久禮邇之乃木」「木瓜」「毛介」「石楠花」「俗云佐久奈無差」「木蘭」「和名無久良邇」「檳榔子」「此間旻朗」と漢語例も多く、此等は『本草和名』との連関性に繋がっている。

(11) 鈴木裕也（二〇二三）表一「天治本『新撰字鏡』における仮名の字母」（五頁上段参照）に照らし併せて見ておくことができる。とりわけ、「俗云」を用いない「し」のなかで、「之」以外の頻用度の高い「志」（廿巻本四三語、低い「自」（廿巻本一例）の字母が裏付けられ、さ部では「散」字は『字鏡』には見えず、替わって『字鏡』の字母「作」字五例は「和名抄」には未載となっていることを補足しておく。

(12) 源順『和名抄』両本共通の三語に用いられる「俗説」の用語は、同時代の『作文大体』（二一〇八（天仁元）年頃か）に、「第十俗説凡俗説者世俗所伝之説也」と云う記載が見え、当時衆知のことがらとして取り扱うときの用語となっていたことが分かる。

(13) 『厨事類記』此書巻末に「右厨事類記上下御厨子所預左馬權助／紀宗長自筆也／紙一枚破損畢殘文為秘記必不可及／元禄七年春三月書之



／御厨子所預備前守紀宗恒〔花押〕／四十八歳時（1634-1706）六十七歳」と奥書きする。此が日本料理四条流宗家九代の石井泰次郎の所蔵となっていたのを料理研究家田村魚菜氏が取得し、此れを慶應大学魚菜文庫に収められている。

(14) 『鷹詞』『蒙求臂鷹往來』一冊〔宮内庁書陵部蔵〕や『箸鷹文字抄』『鷹秘抄』（立命館大学図書館蔵）に「兄鶴」と記載が見える（福井久蔵（一九四〇）を参照）。

(15) 『新撰万葉集』（天理図書館蔵）では、「春丹成須由裳」「露丹懸礼留身丹許曾佐里藝礼」「錦裁服許々知許曾為礼」と一部分万葉仮名表記とする。

## 参考文献資料

- 『和名類聚抄』十巻本  
 狩谷掖齋『和名類聚抄訂本』内閣文庫蔵。  
 狩谷掖齋『和名類聚鈔箋注』古写本。国会図書館亀田文庫蔵・東京都立中央図書館河田文庫蔵・内閣文庫蔵・大和文華館鈴鹿本蔵。  
 『倭名類聚抄』廿巻本  
 慶安元年版『和名類聚抄』宮内庁書陵部蔵・内閣文庫蔵（屋代弘賢書込本）。貞享版『倭名類聚鈔』市古貞次旧蔵・架蔵本。  
 三巻本『色葉字類抄』前田本。  
 『作文大体』天理図書館蔵。八木書店複製、二〇一七年刊。  
 印刷自筆本『塵袋』珍書同好会、一九一九年刊。  
 『爾雅翼』第二版。黄山書社、二〇一三年刊。  
 『日本書紀』熱田本。八木書店複製、二〇一八年刊。  
 『日本紀私記』巻下。早稲田大学図書館蔵。  
 『日本国語大辞典』第二版。小学館、二〇〇〇～二〇〇二年刊。

池田証壽（一九八八）「カシコ（彼間）」と「ココ（此間）」：因明大疏抄に

見える肝心記の佚文』『国語学』一五五：三三～四四。

大友信一・江口泰生（一九八六）『和名類聚抄』の正・俗・通』佐藤喜代治（編）『国語論究』第一集。東京：明治書院。

鈴木裕也（二〇二二）『新撰字鏡』天治本と抄録本祖本の先後関係について――仮名の異同と改変から』『調点語と調点資料』一五〇：一～二一。

高田智和・矢田勉・斎藤達哉（二〇一五）「変体仮名のこれまでとこれから／情報交換のための標準化」『情報管理』五八（六）：四三八～四四六。https://doi.org/10.1241/johokant.58.438

中田祝夫（一九七九）『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』影印翻刻。東京：風間書房。

永山勇（一九六三）『国語意識史の研究』東京：風間書房。

新野直哉（一九八六）『和名類聚抄』の「俗云」の性格――「A俗云B」の場合について』『文芸研究』一二二：五三～六八。

西宮一民（一九六九）『和名抄所引』『日本紀私記』『皇學館大学紀要』七：一～二六。（本稿は一九七七年刊『日本上代の文章と表記』東京：風間書房、三〇六～三一五頁によった。）

萩原義雄『和名抄』語解析の調査録（『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』へ）『BAND・情報言語学研究室 Gocm』https://band.us/band/93621298/に掲載して現在公開中。（二〇二三～現在維持中。二〇二五年五月確認）

濱田敦（一九九八）『日本語の史的研究』京都：臨川書店。  
 福井久蔵（一九四〇）『鷹詞に就きて』『言語研究』六：一～一三。日本言語学会。

不破浩子（一九八八）『箋注倭名類聚鈔』について』『謄写版、第一冊。私家製本。（本稿では、複製による一九九一増刊を参照した。）

馬淵和夫（一九七三）『和名類聚抄古写本・声点本文および索引』東京：風間書房。

宮澤俊雅（一九九四）『和名類聚抄の「此間」について』『国語国文研究』九五：二～一六。（宮澤俊雅（二〇一〇）に再録。）

宮澤俊雅(二〇一〇)『倭名類聚抄諸本の研究』東京・勉誠出版。

山田健三(二〇一二)「書評 宮澤俊雅著『倭名類聚抄諸本の研究』」『日本語の研究』八(一)・一二二～一二九。

山田孝雄(一九四〇)『國語の中に於ける漢語の研究』東京・宝文館。(本稿は一九七〇年の復刻版によった。)

山田孝雄『倭名類聚鈔考證附録／改訂箋注倭名鈔訓纂』合一冊、川瀬一馬旧蔵・架蔵和綴本。

## 追記

『和名抄』所載の「俗語」総数一〇例(十卷本七例、廿卷本一〇例)について補足する。

6538【特牛】 6588【油／擣押】 6891【烟／燐】 7213【模】 7293【褻亵】  
7516【甄】 \* 7534【袴奴】 7534【酎酒】 7732【茄子】 7816【鶯鳥／鶉】

※茲に見える俗語については「世俗語」「通俗語」を意味していると考え、和語「ことひ」「しろむ」「けむたし」「かたき」「おほつほ」「つきはた」「そひ」「ゑくし」「かへる」と云った和語について個々に考察する必要がある。その詳細については、researchmap (<https://researchmap.jp/HagiharaYoshio>) に別稿として掲載する予定である。

## 付記

本稿(の一部)は、人間文化研究機構の異分野融合による総合書物学の拡張的研究国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」(プロジェクトリーダー…高田智和)の研究成果である。



## 附表

表1 『和名抄』「俗用」廿卷本と十卷本（総数六一語）の一覧語数表

通番	分類	廿数	十数	十類	標記語
1	人倫	1	3		髻髮。負。邊鄙。
2	術藝	2	2		的。挿頭花。
3	音楽	3	3		鞀鼓。琵琶「撥附」。日本琴。
4	居処	3	1		倉廩「檄字附」。簾子。十字。
5	船	2	2	船車	舳。舳。
6	香藥	0	1		青木香。
7	布帛	2	2		白糸布。紵布。
8	調度	11	10		墨「挺字附」。髮。澤。嚴器。匣。盥。紅藍。篋。歩障。幃。檜楚。
9	器皿	4	3		鍍。匣。盥。籠。
10	飲食	3	3		藟。雉脯。未醬。
11	菓蔬	3	4		熟瓜。胡瓜。芋「軟附」。薺。
12	菜蔬	10	8		海藻。滑海藻「未附」。海松。陟釐。神仙菜。紫菜。海蘿。大凝菜。辛菜。菰。
13	羽族	1	1		鴈。
14	鱗介	6	2		鰕。鮭。河貝子。海蛸子。老海鼠。蝙蝠。
15	×	0	4	龜貝	
16	×	0		蟲多	夏蟲。
17	草木	5	3		千歲藥。筒。篠。黒柿。杉。
合計		56	53	61	

※右線を施した標記語は、廿卷本のみに「俗用」表示があり、十卷本が「用」「此間」や無表記とする語を示し、逆に左線を施した標記語は、十卷本のみに「俗用」表示があり、廿卷本が「俗用」「俗人」や無表記とする語を示した。

な					た					さ					か					あ		
	奈				多	太					沙	佐	可	賀	加		阿	字				
	21				8	24					1	24	1	10	50		21	数				
	に					ち						し			き		い					
	迹			遅	智	知						之		枳	岐	伊	以	字				
	5			1	5	21						35		1	30	6	11	数				
	ぬ					つ						す			く		う					
	沼				津	豆						須	玖	俱	久		宇	字				
	3				1	18						17	1	1	38		19	数				
	ね					て						せ			け		え					
	祢				手	天						世	勢		計	介	江	衣	字			
	4				1	2						3	4		1	3	2	4	数			
	の					と						そ			こ		お					
能	乃	兎	土	都	止	度						蕪	曾		胡	古		於	字			
9	32	1	1	9	10	11						1	9		1	17		14	数			
							ゼン	セン	シン	ジャウ	サン	サン			ギヤウ		音	字音				
							軟	錢	心	常	散	三			行			字				
							1	1	1	1	2	3			1			数				

表2 「俗云」万葉仮名字母数表（十卷本『和名抄』廿卷本による欠語箇所を補記）

わ                      ら                      や                      ま                      は														
	和			良	屋	耶	也	夜	萬	末	麻	万		波
	5			23	1	1	2	15	1	3	4	14		35
	ゐ			り								み		ひ
爲	井	里	理	利						弥	味	美	俾	比
1	1	1	5	27						1	1	32	1	48
				る				ゆ				む		ふ
			留	流				由		無	牟	无	伏	不
			4	14				5		1	3	18	1	19
	糸			れ								め		へ
	恵			礼						米	女		篇	倍
	2			5						2	7		1	6
	を			ろ				よ				も		ほ
	乎	侶	呂	路				与				毛		保
	4	1	3	6				4				21		14
								や						
	々							山						
	19							1						

表3 『和名抄』十卷本と廿卷本「ぬ」の字母「沼」と「奴」収載表

	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通番
計	卷十	卷九	卷八		卷七	卷六		卷五	卷四	卷三	欠	欠	欠	欠	欠		卷二		卷一	卷十
45	5	1	3		4	6		4	10	10							1		1	沼
19	3	4	1		2	3		0	2	1							1		2	奴
計	卷廿	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	×	卷三	卷二	卷一	卷廿
51	8	3	4	4	1	3	8	1	18	1										沼
47	0	1	2	1	0	0	1	0	3	0	2	4	10	8	10		2	2	1	奴

## Use of the Word “Zoku: 俗” in the Explanatory Notes of the *Wamyō-ruijushō* 『倭名類聚抄』

HAGIHARA Yoshio

Honorary Professor, Komazawa University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This study examines the word “Zoku: 俗” and its usage in Japan’s historical dictionary, *Wamyō-ruijushō*: 『倭名類聚抄』 (often abbreviated as *Wamyōshō* 『和名抄』). Initially, 「俗」 has been researched in explanatory notes, particularly in Chinese-character texts within Buddhist writings, such as those compiled China. Japanese scholars have also used 「俗」 as “Sezoku: 世俗字” or “Tsuuzoku: 通俗字”. Many early Japanese researchers have considered it as a legitimate word in the old dictionary and made it publicly available. Regarding the word 「俗」 compiled by Shitago MINAMOTO: 源順 in the Heian period, its traditional evolution will be clarified by examining the content of each heading-word’s notes.

The data include 10 volumes—①馬淵和夫影印諸写本（風間書房刊）: Kazuo MABUCHI, Manuscript-photo-book, Kazama-shobo, ②狩谷掖斎『倭名類聚抄訂本』（内閣文庫蔵）: Ekisai KARIYA, *Revised Wamyō ruijusho*, Cabinet Bunko—and 20 volumes—③那波道圓編纂元和版（古写本類）: edit. Doen NAWA’s old manuscript from the “Genna” period—, and these data will be analyzed to clarify the overall meaning of the word 「俗」 and to prepare interscholastic tables based on each heading word. Understanding its traditional usage is crucial for researchers. Main words were researched in present-remaining books, defining each usage of 「俗」 also involved referencing old Japanese dictionaries such as *Jiruishō* 『字類抄』 or *Myōgishō* 『名義抄』 . Each completed paper was made public, aiming to contribute to the continued scholarly use of historical dictionaries.

**Keywords:** old Japanese dictionary, “Zoku: 俗”, Heian period